



宗像と宇佐の女神、そして卑弥呼

〔付編〕魏使の邪馬台国への行程

－宗像神信仰の研究(4)－

静岡理工科大学 名誉教授
矢田 浩

概要 宗像・沖ノ島の謎を解くため、全国の神社の祭神分布を手がかりに宗像神信仰の起源の解明を行っている。三女神のうちこれまでに解明に到らなかった湍津姫について、史料や伝承が暗示する宇佐神宮の女神との接点について検討した。その結果、宇佐の女神の旧名「比咩(本来ヒミと発音)」は「卑弥呼」への崇敬から生まれた神で、種々の事情で名を変え宗像の湍津姫にもそれが受け継がれているという仮説が導かれた。卑弥呼が拠っていた邪馬台国の所在とその成立の経緯について、原典史料と考古学的物証による検討を行い、この仮説を裏付けることができた。これで沖ノ島祭祀の謎解きの土台が整った。

1. はじめに

宗像と宇佐とは、時を越えた因縁がある。

このたび(平成 29 年(2017)7 月 9 日)、日本の世界遺産候補「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の登録がめでたく決定した。この遺産の中心は、もちろん沖ノ島古代祭祀遺跡の膨大な出土品である。それが祭祀場所から動かされているのに拘わらず、厳格な学術的態度で調査・記録・保存されているため、ユネスコの諮問機関イコモスは「真実性が証明され」と認めた。

この調査の企画・実施・管理の主体は、「宗像神社復興期成会」であった。これは「日本の石油王」と言われた出光佐三が、出身地の名社の衰微状況を知り、その復興推進のため昭和 17 年(1942)に創始したものである。この会の事業の重要な柱の一つが神社史の編纂であったが、その過程で沖ノ島の神宝に散逸の危機が迫っていることを知り、「一木一草一石たりとも持ち出してはならない」という禁忌に拘わらず、宗像大社の賛同を得て学術調査に踏み切った。佐三はこの事業の全資金を提供したばかりではなく、昭和 29 年(1954)の立案から昭和 54 年(1979)の最終報告書完成まで長期に亘る全事業について、会長の代理として実弟の出光泰亮他を派遣するなど、常時統括・監督させた[1]-[4]。実質的に佐三の直轄管理のもとに実施したに等しい。このような揺るぎない管理体制があったからこそ、調査終了の 46 年後においても、イコモスの高い評価を得ることができたのである。

佐三が出た宗像市赤間の出光家は、宇佐神宮の神官の末裔である。宇佐神宮に近い宇佐市出光を本貫とする宇佐の出光家は、古代から宇佐神宮の神官を務めてきた宇佐氏の一族である。宗像神社に対する佐三の深い崇敬の念は、その血が知っていたのではないかと思わせるものがある。

宇佐神宮は、主祭神として宗像三女神をも祭る。これは『日本書紀』神代紀第六段第三の一書に、三女神を「葦原中國之宇佐嶋に降り居さしむ」(訓読は岩波文庫版[5]による)とあることを根拠としている。すなわち三女神の最初の鎮座地を宇佐とするのである。宗像の出光氏は、まさにこのコースを辿ったのである。

この「三女神宇佐誕生説」を支持する歴史家もいる[6]。しかし前報までに検討したように[7]-[9]、三女神は神話が記すような同時誕生では決してなく、それぞれ異なる起源を持つ神々であると考えられる。そして江戸時代初期の神道研究者たちは、宇佐神宮の神を三女神のうちの湍津姫と考えていた[9]。本報は、このような宗像と宇佐の女神をめぐる謎を解明し、湍津姫の起源に迫ることを目的とする。

これまでの本研究の概要を、以下に示す。

本研究は、宗像・沖ノ島の謎を信仰史の面から明らかにするため、全国の神社に祭られる宗像の三女神および関連神の分布の調査検討を中心に行ってきました。日本の神信仰では、一度祭られた神は原則として捨て去ることをしないという慣習が根強い。このためそれを祭る神社の変遷に拘わらず、多くの神社で古代以来の祭神を知ることができる。具体的には神社本庁の『平成「祭」データ』(以下『平成データ』と表記)のWINDOWS版[10]を基礎資料として解析を行い、歴史資料による補強と考古学的事実との対比と併せて古代の神信仰の姿の復元を試みてきた。

第一報[7]では、主として宗像神を祭る神社の全国分布を検討した。宗像神(宗像大社の表記で田^たごりひめのかみ たぎつひめのかみ いちきしまひめのかみ 心姫神・湍津姫神・市杵島姫神の三女神)には非常に多くの表記があるので、以下各神をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる。宗像神を祭る神社は沖縄県を除く全国で、3500社以上の神社の本殿に祭られている。そのうち本来の宗像神信仰ではない八王子信仰社を除外した約2900社について、都道府県別の分布を検討した。

宗像神がその誕生神話のように三神セットで祭られている場合は、全体の28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマ一神を祭る神社で、全体の60%を占める。その比率は関東・東海・近畿に多い。このように多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ(一部ムナガタ)の名を持つ神社は69社と少なく、しかも全国に散在する。宗像神社は、千葉県印旛沼周辺の13社が最も多い。

胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社も遠方に多く、青森県津軽地方には7社(かつては12社)も残る。このように宗像神が集中して祭られている地域について歴史史料や考古学的知見などと対比して考察した結果、宗像神の全国への普及は古代以前に遡ると推定され、特に弥生文化の日本海に沿っての北上と、それに続く内陸から表日本への波及に対応する場合が多いと見られた。それ以降も、古くからの繋がりのあったと見られる有力古代氏族の移住を先導するようにして、宗像神が集中的に祭られることが多い。古代以前の宗像海人族が単に通商に従事していたばかりではなく、人口の少ない農業適地への移住者に対する情報提供や先導など、今日の総合商社的な役割を担っていたことを示唆する。しかしそのような広域活動は、ヤマト王権がほぼ全国を掌握すると制約を受けざるを得なかつたと思われる。沖ノ島祭祀の開始は、その時期に対応していると推定された。

宗像神信仰の本拠地福岡県では、宗像神を祭る神社の存在比は全国の平均レベル程度である。これは広域にまたがる福岡県内で、宗像神信仰が他神信仰と棲み分けしているためと考え、第2報[8]では北部九州諸県について旧郡単位で分布を調査し、他神信仰との関係についても調べた。

宗像神はムナカタ(注1)から豊前・豊後に到る東部地域と、松浦半島から有明海に到る西部地域とに高密度で祭られている。両地域の間には玉依姫と埴安神を祭る神社が集中するベルト地帯があり、宗像神およびその東部分布域に高密度で祭られる水神 龍神(以下オカミ)のベルト地帯とは統計学的に有意な棲み分け関係にある。これら分布域の起源は、弥生時代に遡ると推定された。九州北方海域の宗像神分布から、朝鮮半島から日本列島に到る古代通商路として、沖ノ島を経由するムナカタルート1と、壱岐を経由するムナカタルート2(佐賀県経由有明海方面と西海方面へも分岐)が推測された。

三女神のうちイチキシマは、特に高密度で祭られている遠賀郡域にルーツがあるよう見える。このことから地名ムナカタの語源についての新説を提出した。これは古代にはムナカタより広域の「大ムナカタ」を考慮すべき場合が多いことを説明する。

第3報[9]では、沖ノ島祭祀と三女神信仰との接点を探るべく、沖ノ島の神信仰の歴史的変遷とその背景を、記紀神話・歴史史料・祭神解析・考古学的知見などから総合的に検討した。

宗像海人族がおそらく縄文時代以来祭ってきたイチキシマを沖ノ島の神とする信仰は、近世に到るまで根強い。

タゴリは弥生時代初めからのムナカタと出雲との深い繋がりを象徴する神で、特に弥生時代後半に沖ノ島との繋がりが強まったようである。これは朝鮮半島の鉄が山陰に直接流入し始めた時期に、沖ノ島がそのルートの中継地となっていたためと考えられる。古墳時代はじめ頃出雲の主神直系の子孫がヤマトからムナカタに入り宗像氏の祖となるが、この頃以来鉄に飢えていた畿内に鉄が多量に流入する。これは南朝鮮諸国と結んで壱岐経由の交易路を確立していた博多湾岸諸国に対抗する瀬戸内海経由の貿易の大動脈が確立されたためと思われ、沖ノ島祭祀はその誓約の祭りとして始まったと思われる。誓約神話はそのことを象徴的に示す。

タギツはムナカタとの直接の接点が見えない。その祭られ方や祭神分布から、記紀に見えないが朝廷の重要神であった瀬織津姫(以下セオリツ)と同神の可能性が示唆された。この神はムナカタでも重要な位置にある4社に祭られてきた。そして宇佐の周辺には、三女神のタギツがセオリツに置き換わった古社もある。この神の素性を探ることが、沖ノ島祭祀と宇佐降臨神話のある三女神誕生の謎を解くカギになると考えられた。

本報はその解明を目的とする。

その過程で、邪馬台国とその女王卑弥呼についての考察がどうしても必要である。そこで[付編]において、原典の『三国志』東夷伝倭人条(以下「魏志倭人伝」)の記述のみに基づき、実際の地勢と当時の

交通事情を考慮して邪馬台国的位置を推定する(注 1)。その推論を用いて、邪馬台国の女王卑弥呼に対する信仰の行方を探り、セオリツ・タギツ・オカミとの繋がりを追及する。

2. 宇佐神宮の女神

2. 1 宇佐神と大和朝廷

宇佐神は、大和朝廷にとって特別な神であった。図1に示すように宇佐の八幡大神と比咩神は、天平勝宝元年(749)人間なら親王の位に当たる品位を授けられている(注 2)。以下神階に関する典拠は主として岡田莊司らのデータベース[13]による。

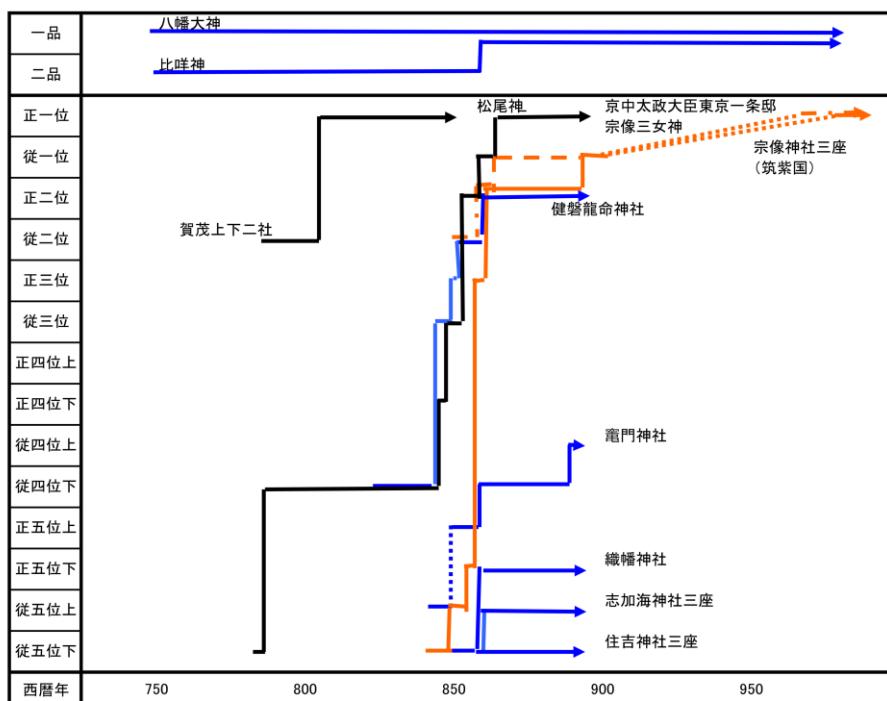


図1 神社の神階の推移 (黒:畿内有名社 青:九州島有名社 赤:宗像神社)

中でも両神が受けた一品は、皇太子の受ける位である。神に品位が授けられるのはきわめて珍しく、他に備中の吉備津彦命社と淡路島の伊左奈伎神社の例があるが、いずれも9世紀であり、宇佐神の授位は他の諸名社に先立つ8世紀半ばのことである(注 3)。図1に畿内の名社代表として京都の賀茂上下2社を示したが、一般神社が最高位の正一位に到達したのは9世紀に入ってからである。筑紫の宗像神社が他神を追い越し京中の宗像神を追って急速に昇叙された経緯は、別報で考察予定である。最終的に正一位となったのは10世紀後半である[14]。筑前国(筑紫)の例で示すように、一般の有名地方神はせいぜい従四位止まりで、肥後の健磐龍命神社(阿蘇神社)は例外的に厚遇された神社の一つである。

宇佐神にこのような厚遇が与えられたのは、聖武天皇発願の大仏造立を援助したためである。天平17年(747)朝廷は八幡神に遣使して大仏造立成就を祈願させた。八幡神はこれに答えて、「天神地祇

そつ いざない
を率し 誘 いて」(『続日本紀』[15])それを助けると託宣した。さらに完成間近い大仏の尊顔を拝すべく神輿に乗って上京した。上記の品位はこのときに受けたものである。なお『延喜式神名帳』(既報[7]参照)では、宇佐郡の神として八幡大菩薩宇佐宮神社・比賣神社(初出の『続日本紀』では比咩神)・大帶姫廟神社の3社が挙げられている。大帶姫廟(大帶姫は神功皇后の名の一つ)が神階を受けていないのは、宇佐神宮本殿に祭られたのが八幡神の上京以降の弘仁14年(823)であるからである。

このような八幡神の朝廷との縁の始まりは、養老4年(720)の隼人征伐である。それより前南九州の隼人は大和朝廷に貢献するなど良好な関係を保っていたが、班田収受の強制に不満が高まり大隅国国司を殺すに至った。このとき八幡神は征討軍の先頭に立ったと伝えられる。九州での律令制先進地豊前から、多くの民を隼人の地に移住させていたためであろう。

このあと天平9年(737)に新羅の無礼を告げるため伊勢神宮他に遣使したときも、宗像を差し置いて住吉・香椎とともに筑紫の三社に入っている。そして同12年(740)藤原広嗣の乱が起きたとき、朝廷は征討に当たった大將軍大野東人にまず八幡神に祈らせている。国家有事の際の護国神との位置づけが確立していたのである。上記託宣に示されている自負は、このような背景から理解できる。

2. 2 八幡神信仰の沿革

しかし八幡神信仰の成立は、それほど古くは遡らない。天平12年(740)の上記記事が、六国史に現れる最初である。中野幡能によると[16]、同社については平安時代の17種の縁起が伝わっているという。それらに示される最古の年代は6世紀中頃の欽明天皇の時代で、要約すると応神天皇の神靈として八幡大御神が宇佐郡内に現れ、郡内各地を移り歩いた後最終的に現在の龜山に鎮座したというものである。

しかし比咩神信仰の起源は、より古いと考えられている。中野幡能は、原始八幡信仰が地元の豪族宇佐氏の女神信仰に始まり、北部九州から南下してきた渡来系の辛島氏(辛=加羅)がそれを引き継いだと考えている[17]。そこに6世紀大神比義(おおみわ)と称する人物が現れ、応神天皇信仰を持ち込んだ。比義の素性ははつきりしないが、大和の大神氏の出と考える人が多い。

記紀の神功皇后説話では、応神天皇は妊娠中の神功が「三韓征伐」に渡海し、帰国後糟屋郡宇美町で生んだ子とされる。神功説話は記紀に詳述されているばかりではなく、古代の各地風土記やその逸文にも数多く登場することで分かるように、古代日本に広く浸透していた。その子の応神が九州生まれとされることから、応神信仰を持ち込むことにより大陸への玄関口九州の有力神となることで朝廷へのアピールを狙ったのである。あたかも欽明の時代には、新羅とのトラブルが頻発していた。

しかし八幡神を宇佐に定着させることは、それほど容易ではなかった。伝承によると、八幡神が現在宇佐神宮の鎮座する南宇佐の小倉山に落ち着くまで、豊前各地を点々とした。八幡神の受け入れにかなりの抵抗があったことを示す。天平勝宝元年(749)から行われていたという行幸会(近世に廃絶)という大規模な神事では、八幡神の神輿は中津市の薦神社(大貞八幡宮)を出発し、宇佐郡内に入ってから

8 社の宇佐神宮摂社を廻ったのち本宮に入る。これは八幡神が小倉山に入るまでの遍歴の反映と思われる。

2. 3 宇佐の女神信仰の起り

宇佐の女神信仰の起源は古い。記紀で初代天皇とされる神武天皇は、日向を出発します海路宇佐に入った(以下『日本書紀』[5]の記述に従う)。このとき神武を宇佐で歓待したのが、菟狹(宇佐)国造の祖菟狹津彦と菟狹津姫の兄妹である(注4)。彼らは神武のために一柱^{うさ}騰^{あしひとつあがいのみや}宮^{ともかき}を造ってもてなした。宇佐市安心院町妻垣にある妻垣神社に伝わる伝承によると、同社背後の共鑰山の中腹にあるその上宮が一柱騰宮の跡であるという。その上宮の祭神は、宇佐神宮はじめ祭られたと同じ比咩大神である(注5)。上記中野幡能[17]によると、宇佐神宮最古の伝承にも比咩神が安心院の都麻垣に住む神と記すという。

ただし宇佐神宮の縁起には、はじめ宇佐氏は現れない。渡来系氏族は、はじめ福岡県田川市の香春神社で女神を祭っていたと考えられている[17][19]。香春神社は宇佐神宮と並ぶ豊前国の式内社で、『延喜式神名帳』では辛國息長大姫大目命神社・忍骨命神社・豊比咩命神社の3社からなる(注6)。辛^{から}國は加羅国であり、宇佐神宮の女神と同様渡来系の氏族が祭る。

行幸会と並ぶ宇佐神宮の大規模な神事であった放生会(注7)は、この豊比咩命神社から出発する。この神社はかつて香春岳の三ノ岳の採銅所にあった。ここに古宮八幡宮があり、文字通り八幡信仰発祥の地と考えられる(祭事には豊比咩命が下向する)。ここで鑄造された銅鏡が、途中さまざまな儀式を経て最終的に宇佐神宮に奉納される。香春神社の神官も渡来系氏族が務めており、宇佐神宮の辛島氏と繋がりがあると考えられている。この銅鏡奉納儀礼は、田川で銅鉱を開発した渡来系氏族が南下して同じく女神を祭っていた宇佐に入り、その祭祀権を獲得するまでの道筋を象徴しているように思われる。

嘉穂・田川・京都・築上郡に多い新羅神信仰からも、渡来人は福岡県東部に広く居住していたと考えられている(注8)。これは既報[8]で見たオカミベルトとほぼ一致している。

3. 特別な女神「比咩」

3. 1 「比咩」へのこだわり

それにしても古い女神の尊称に「比咩」の字が好んで当てられるのはなぜだろうか。宇佐神宮や香春の女神は、比売と書かれることも多いが、本来は比咩と書かれた。この2女神が、いずれも渡来系の人々が祭った神であることが注目される。

前報[9]で紹介した大祓詞中のセオリツ以下の祓戸四神(注9)の他の二女神も、平安時代の『延喜式』には比咩と書かれていた。『延喜式神名帳』(既報[7]参照)で社名から女神の名を全て拾い出すと、「比

賣」が 60 例と圧倒的に優勢であるが、「比咩」も 29 例ある。しかし「姫」は 10 例しかなく、まだ十分普及していなかつたらしい。あとは「比女」が 7 例、「日女」が 4 例、「日賣」と「火賣」が各 1 例となっている。その分布を見ると、畿内ではほとんどが比賣であり、比咩は全くない。比咩は、能登に 12 社、伊豆に 10 社と特定の地方に集中し、いずれも畿内から離れたところにある。比咩が畿内を中心に比賣(比売)に変えられたように見える。

「比咩」は、現在多くの神社に受け継がれている。『平成データ』によると、祭神名に「比咩」のある神社が全国で 916 社ある。県別に見ると、図 2 のように石川県に 208 社が集中し、次いで熊本県の 101 社と岐阜県の 82 社の順となっている。複数の比咩神を祭る神社が 87 社あり、比咩神の総数は 1110 柱である。表 1 は神社の系統別に見たもので、図 2 ではそれを県別に表示している。八幡系の神社が全国で 291 社と最も多く、そのうち比咩の前に別の名の付かない単なる「比咩神」または「比咩大神」(以下単比咩と書く)を祭るのが 259 社で、宇佐神宮創始のころの組み合わせが各地に根強く残っている。

表1 比咩神を祭る系統毎の社数とその比率

	比咩神を祭る社	うち 単比咩	単比咩率(%)
全比咩神	916	351	38
八幡系社	291	258	89
白山系社	289	1	0
阿蘇系社	95	16	17
春日社	79	76	96

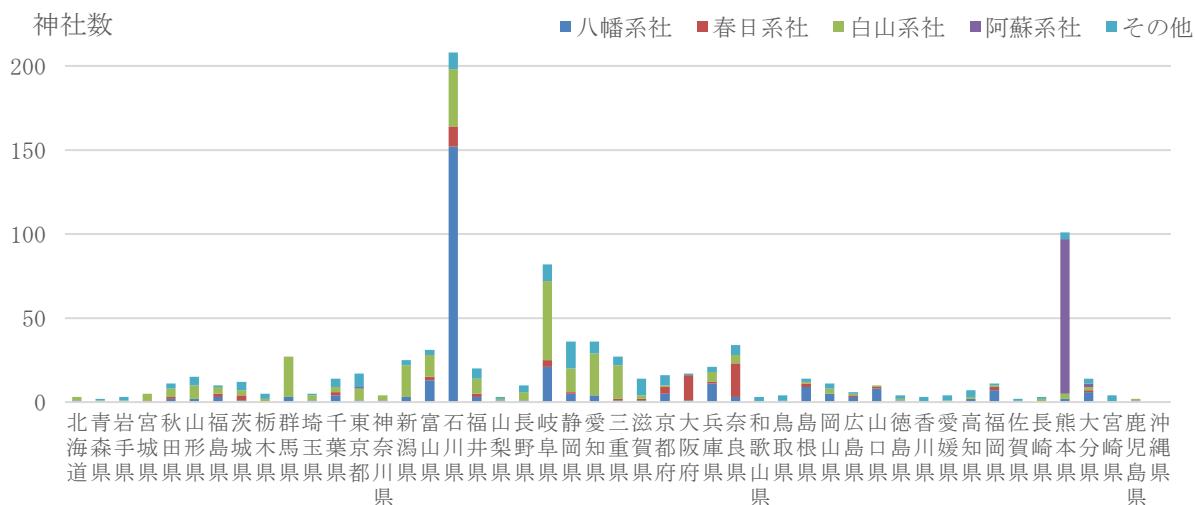
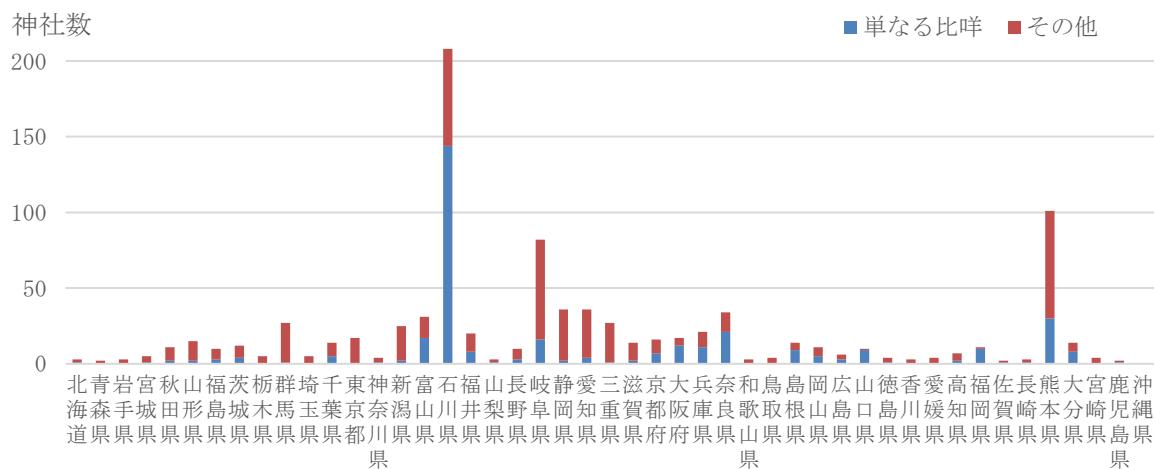


図2 比咩神を祭る神社の系統別全国分布

このうち、かつての宇佐神宮のように、単比咩を祭る社が 355 社ある。図 3 に示すように、このような社はやはり石川県に最も多く 144 社もあり、中でも「比咩神社」という名で単比咩のみを祭る神社が河北郡津幡町にある(注 10)。

次ぎに多い白山系の 289 社は、白山比咩を祭る 188 社とクリ系比咩を祭る神社の合計で、両神が重複する例も 1 社ある(普通クリは菊里と書かれるが、その他の表記もある)。白山系の神社では原則として単比咩を祭ることはないが、石川県穴水町の白山神社には主祭神に幾具理比女命とともに比咩神がある。白山は石川県の山であるが同県内にあるのは 34 社で、隣の岐阜県の方が 47 社と多く、東海から関東にかけて多く分布する。



3. 2 「比咩」は一番「偉い」女神に附く

二柱以上の女神が祭られる神社では、「比咩」は原則としてそのうち一神のみに附く。「比咩」を祭る916社のうち275社が複数の女神を祭るが、うち183社は比咩が一柱で他は比売・姫・媛などと書かれている。「比咩」が二柱以上祭られるのは、上記阿蘇系の神社のほか、セオリツなどの祓戸の三女神や宗像の三女神など同格の神が並ぶ場合にほぼ限られ、合祀によると思われる場合もごく少数ある。

ほむたわけのみこと おきながたらしひめのみこと
実例を挙げよう。福井県武生市の八幡神社の主祭神は、誉田別尊(応神天皇)、息長帶比売命(神功皇后)、比咩大神となっているが、このような例は全国に多く見られる。ところが福島県双葉郡広野町の檜葉八幡神社では、その神功が大帶比咩命(大帶は神功の別名の一つ)となっている。ほかに比咩神が入っていないからである。

また上記のように白山ヒメと菊理ヒメにはほとんど比咩が附くが、この両神が並んで祭られている場合は、福井県南条郡南越前町の白山神社のように、白山比咩大神、菊理媛神と一方だけに「比咩」が附き、他方は比咩を譲った形となっている。白山比咩は菊理ヒメには強いが、愛知県豊田市の白山神社では祭神が伊弉那美命、大宜津比売神、菊理比咩命となり、菊理ヒメも他ヒメ神に勝って「比咩」が附く。白山神はおおむね他神に対して強力であるが、岐阜県本巣市(旧真正町)の八幡神社では、天児屋根神、比咩神、白山姫神(前後省略)と並んでいて、春日系の比咩神には勝てない。なおこれらの神は配祠であって、主祭神の八幡神に続きそこにも比咩大神があつて重複する珍しい例である。

セオリツなどの祓戸神の「比咩」も強い。和歌山県日高川町の下阿田木神社では、合祀社の中に丹生津姫・市杵島姫があるのに瀬織津比咩だけに「比咩」が附く。同格と思われる女神の間でも、愛媛県西条市(旧丹原町)の厳島神社では、主祭神が市杵島姫命、田凝比咩命、湍津姫命となっていて、タゴリだけが特別扱いとなっている。同様に、祓戸四神の中でもセオリツのみに「比咩」が附く例が見られる。

以上のように、ヒメ神の中で「比咩」神には特別の意味があるらしく、一社にはできるだけ一神だけにする傾向が強い。その「比咩」が附く女神のなかでは、八幡神・春日神に伴う単なる比咩(大)神が最も優先され、次いで白山神・セオリツが優先されている。

以上の傾向は、比咩神を祭る神社の中で、伝播の大元である八幡系神社の祭る単なる「比咩」の神名が、最も尊ばれたことを示す。春日系神社の祭る女神がやはり単比咩であることは、中臣氏が渡来人の圧倒的に多かった豊前出身の可能性が高いことを考えれば理解できる(注 11)。八幡系神社の祭る「比咩」も、春日系神社の祭る「比咩」も、本来同じ神なのではないか(注 12)。このことは、長野県の二柱神社と皇大神宮、岐阜県の六社神社などのように、主祭神に八幡神と春日神があつて単比咩が一柱だけ祭られている場合があることからも分かる。

以上のことから、宇佐を起源とする比咩神にあやかって、他の尊敬すべき女神にも「比咩」が用いられるようになったのではないかと思われる。そしてそれを祭るグループや地域を明らかにし大元の比咩神と区別するため、さまざまな修飾語を附けるようになったと解釈できよう。そのような「固有名詞+比咩」の神々の中で、白山神・祓戸神がより早く名付けられたため、八幡系および春日系神社の祭る単比咩

に次いで序列が高かったと考えられる。いずれにせよ「比咩」が付く神名は、大元の宇佐の女神に対する崇敬の念に根ざしているように思われる。

3. 3 「比咩」は渡来系氏族共通の女神か

宇佐神宮と香春神社の比咩神が、渡来系氏族の祭った神であることは先に見たとおりである。そのほかにも、渡来系氏族が比咩神を祭ったことが明らかな例がある。その一つは、朝廷が有事に奉幣していた「二二社」の一つ京都の平野神社(明神大)である。同社は、現在今木・久度・古開・比売の四神を祭るが、この比売は『文徳天皇実録』仁寿元年(852)に合殿坐須比咩神と書かれているなど、古代には比咩神と書かれることが多かった。この神社は、大和の今来郡(高市郡)に多く住んでいた百濟系渡来人の祭る神を、平安遷都に伴い高野新笠とその子の山部親王(後の桓武天皇)が京都に移したものである[25]。高野新笠は百濟系渡来人の娘で光仁天皇の後宮に入っていた。正一位に叙せられた今木神は、滅亡した百濟の王であるという。平野系であることが明らかな神社は、平野の名の付く7社を含め全国に10社あるが、うち9社がヒメ神を祭る。そのうち7社が比売神を、2社が比咩神を祭る。いずれも別の名を冠しない単なるヒメ神であり、渡来人にとって単に比咩(比売)というだけで通じる神であったことが推察される。起源が古いと考えられる「比咩神」を祭る平野神社は、大分市と松浦市にある。来日の頃の因縁を示すものであろうか。

他の例として、延喜式に載る能登國の美麻奈比古神社と美麻奈比咩神社が挙げられる。社名から明らかなように、これらは朝鮮半島の任那人(注 13)からの渡来人が祭った神と考えられる。志賀剛[26]も、任那人の祖神を祭るとする。能登は渡来人の特に多いところとされる。

延喜式には能登國にそのほか比咩を名に持つ10社が載るが、これも渡来人が祭った神ではないか。手速比咩、奈豆美比咩のようにいずれも地名あるいは氏族名を表す言葉が先に附いているが、これは単に比咩神社とすると互いに区別ができないためそれぞれのグループゆかりの名を前に付けたものと思われる。

伊豆の10社の比咩神も、同様に考えることができよう。これらの女神は、三島の三嶋大社の主神に対し、その后神などと関連づけられている。この三嶋大社の主神は愛媛県の大三島神社の祭神大山祇と事代主であるが、もともとの神は大山祇とされる。大山祇は、『伊予國風土記』(逸文)に百濟から渡來した神と記されている[20]。静岡県はセオリツを祭る神社が全国で最も多く29社あるが、瀬織津比咩の表記も9社と最多である。特に大井川の上流から河口付近にかけて6社の瀬織津比咩を祭る社が分布する。このあたりも渡来人の多いところと言われている。後に武藏に渡来人の大居住地ができたことを考えると、太平洋に沿って東進する途中で、まず駿河・伊豆に根拠を求めたことは理解できる。

はじめに比咩神を祭った豊前の渡来人の出自は、『豊前國風土記逸文』[20]が記すように新羅系である。加賀・越前で強い白山信仰は、新羅(半島での発音はシラ)の山岳信仰が入ったものと考えられている(白山は、もともとシラヤマ)。白山比咩の神名は、新羅系渡来人が祭った神と考えると理解できる。また、あまり指摘されていないようであるが、菊理比咩のククリは高句麗のことではないか。高句麗人がコ

クリと呼ばれたことは、よく知られている。新羅と高句麗は隣接していたため相互に影響が大きく、渡来後も助け合っていたのであろう。上記能登の美麻奈比古・比咩神社が白山系社の多い地方にあることも、新羅が南下して任那を含む加耶地方を勢力下においたことを考えると納得できる。

3. 4 「比咩」は本来ヒミと読み卑弥呼を指すか

このように様々な系統の渡来系氏族が共通して比咩神を祭っているのは、「比咩」が多くの人々の記憶に残っていた偉大な渡来系人物の神格化だからではないだろうか。そして「比咩」という表記に対する強いこだわりは、この表記が本来「ヒメ」とは違った読み方をされていたからではないかと思われる。「咩」という珍しい字は、いずれの漢和辞典にも羊の鳴き声を表す字とあり、他の意味はない。その発音は、「ミ」または「ビ」であって、「メ」という音は記されていない。すなわち、宇佐にもともと祭られていた女神は、「ヒミ」という名であったのではないか。

この名は、直ちに邪馬台国の女王卑弥呼を連想させる。古代中国語の権威白川静によると、「呼」はもと「乎」と同じで、神を呼ぶときの強く発音される声である[27]。日韓古代語の専門家金思燁は、「『呼』は、古代の新羅人が男女の名前に添尾される美称、尊称」であるという[28]。いずれにせよ、卑弥呼の固有名は「ヒミ」であって、尊敬の意を込めて「ヒミコ！」と呼んでいたのを、そのまま魏使が記録したのではないか。

卑弥呼が渡来人かどうかは『魏志』からは読みとれないが、当時の日本に、魏帝と親書をやりとりしてその恩寵を受けることができるようなリテラシーを備えた人物が、渡来系以外にいたとは思われない。仮に對外交渉がもっぱら渡来系官人によるものだったとしても、中国の皇帝や官人にこれほどの厚遇を受けるような指導者は、古代の日中交流史を通じて見当たらない。後漢の皇帝から金印を受領した奴国王や王侯並みの威信財を下賜された伊都国王の後継者たちに武力によらず推戴されたリーダーは、文明社会で名の通った高貴な血統の人物としか考えられないのではないか。

後漢滅亡後の混乱時帶方郡を建てた公孫氏が景初2年(238)に滅び、郡が魏の直轄となるや否や、卑弥呼が郡を通じて魏帝に遣使したことは、卑弥呼が中国と朝鮮半島の情勢に精通していたことを示している。

[付編]で邪馬台国を宇佐あたりと推定した。また後述のように、宇佐神宮本殿のある亀山が、卑弥呼の「冢」と丁度大きさが一致する。卑弥呼がここに葬られたとすれば、亡くなったあともこの地の多くの人(特に渡来人)の尊敬を集め、神として祭られたことは大いにあり得ることである。そして八幡神(応神)が亀山に入るのにかなりの抵抗があったことが理解できるのである。

多くの神社が単に「比咩」と書く神を祭るのは、その神を指すのにそれだけで十分であったからなのである。セオリツなどの修飾語を付ける必要はもともとなかった。のち「ヒメ」という女神・女性の尊称が生じ(注 14)、これが一般的になったため、「比咩」もこれと混同されてヒメと発音されることが多くなったのであろう。そこで他の女神とはつきり区別する必要がある場合、「比咩」に修飾語を付けるようになったと思われる。前報[9]で述べたように、瀬織津比咩の「セオリ」は、古代朝鮮語の「ソフル(=ソウル)」を意味す

ると考えられる。「ツ」は現在の「の」に当たる助詞である。これに倣って、セオリツ以外の比咩神にも他のヒメ神と同様に固有名を付加するようになったと思われる。

中でも卑弥呼との縁を大事にする伝統がある神社や、古くに本社から勧請された神社は、修飾語を附けず単に「比咩(大)神」と表記してきた。これがヒメと発音されるようになつても、そのままの表記で遺つたと考えられる。現在の春日大社などの「比売(大)神」や「姫(大)神」は、それが当時の発音通りに書かれたものと考えられる。

3. 5 比咩と瀬織津姫の謎が解ける

比咩(ヒミ)が卑弥呼(ヒミコ)のことになると、これまで述べてきた瀬織津姫(セオリツ)と比咩神の謎がよく理解できる。卑弥呼が日本に渡来して倭國の王となつたとすると、渡来人が共通して篤く崇敬するのは当然のことと思われる。

そして、宇佐神宮が託宣などで中央の政治に大きな発言力を持っていました理由も、この文脈から理解できるのではないか。そのころ朝廷を支えていたのは渡来人または渡来系の官僚であり、なによりも権力の中枢にいた藤原氏(中臣氏)が、秦王国と呼ばれた渡来人の中心地豊前地方の出であつたらしい(注 11)。

現在中臣氏の氏神は奈良の春日大社とされるが、本来の氏神は東大阪市の枚岡神社で、中臣氏の祖神児屋根命(コヤネ)と比売大神をここから勧請し、茨城県の鹿島大社と千葉県の香取大社の神に併祭したものである。大阪府内には多くのコヤネを祭る子社(合祀された社を含む)があるが、女神が併祭されている場合うち 15 社が比咩(大)神を祭り、比売(大)神を祭る 12 社より多いことは、女神の本来の名が比咩であったことを示唆する。奈良県でも春日系社のうち 21 社が比咩(大)神で、20 社の比売(大)神より多い。ここでは姫(大)神が 36 社もあって、比売が本来の表記ではなく、比咩が「ヒメ」と呼ばれるようになってから姫や比売が当てられるようになったことを示している。

比咩が、次第に比売・姫・媛などと混同されてヒメと発音されるようになると、その他のヒメ神との区別がつきにくくなる。このため本来比咩(ヒミ)という神であったことを明らかにするため、「ソウルの」という修飾語を附けたのがセオリツ(瀬織津比咩)であったと考えられる。

しかし前報[9]で考察したように、文明世界に対し日本の主体性を主張する目的で創られた正史『日本書紀』では、「ソウルの姫」の名を載せるわけに行かなかった。おそらくこのとき、その元の名に当たる「比咩」も消し去つたと考えられる。そして女神の尊称の表記は、それまで一般的ではなかつたと思われる「姫」にできるだけ統一しようと考へたようである。『日本書紀』には、「比咩」は全く現れない(注 15)。前記のように後続の『日本後記』に宇佐の比咩大神が登場し、『延喜式神名帳』にも多くの比咩神が記されているにも拘わらず、である。『日本書紀』成立以前に「比咩」の表記が存在したことは、『延喜式』に収められた「大祓詞」からも分かる。

前述のように『延喜式神名帳』に「姫」が少ないのは、まだ『日本書紀』の内容が一般に普及していなかつたためであろう。同神名帳で「比咩」が畿内に全くなく、畿内から離れた地方に多く見られるのも、こう考えれば納得できる。『日本書紀』編纂の時期に王権が神の表記(あるいは神名)の変更のキャンペーンを行った痕跡があるが(注 16)、全国への周知徹底は難しかったようである。

4. 瀬織津姫から湍津姫あるいはオカミ神へ

4. 1 瀬織津から湍津へ

前報[9]で指摘したように、湍津の名は『大祓詞』の「高山の末低山の末よりさくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に座す瀬織津比咩」という神のくだりから出たと思われる。ここで瀬織津比咩(以下セオリツ)を修飾する語句がすべてセオリツを祭る神社の名になっている。そして滝の名を持つ神社のうち最多の24社がセオリツを祭り、19社がタギツを祭る。石川県穴水町の滝津神社(祭神滝津姫)や福井県永平寺町(旧上志比村)の多伎津神社(祭神多伎津姫)を見ると、滝の名をもつ神社がその社名を取って祭神をタギツとしたことが推測される(注 17)。これらは元の祭神名がセオリツであった可能性が高い。

このようなことから、上記のような事情でセオリツの名を変えたとき、『大祓詞』のセオリツのイメージをそのまま残す修飾語の「タギツ」としたと考えられる(注 18)。セオリツが原則としてタギツと共に祭られることがないのは、このためであろう。

4. 2 比咩神からセオリツそしてオカミへ

さきに豊前に渡来人が多く、そこで八幡信仰の基盤となった比咩神が祭られたことを述べたが、豊前はまた既報[8]で見たようにオカミ神が集中して祭られている「オカミベルト」の中心である。それではオカミ神と比咩神(後セオリツ)とはどのような関係があるのだろうか。

その手がかりが、ムナカタにある。前報で見たように福津市津屋崎の波折神社の主祭神筆頭がセオリツであるが、この神社の縁起を文政七年(1824)福岡藩の儒者青柳種信が書いている。その冒頭に、「右当社に祭るところの神は瀬織津姫大神 また木船神とも称え申す 住吉大神志賀大神にておわします(以下略)」と書かれている(『津屋崎町史資料編上』の解説文[29]による)。筑前三風土記の一つ『筑前国続風土記拾遺』を著した種信は福岡藩を代表する国学者で、当時の学者の間では広くその見識が認められていた。当時国学者の間では、セオリツと木船(貴船)神(=オカミ神)が同神と考えられていたらしいのである。

一方、どちらが先にあったのかを示すのは、富山県砺波市庄川町に近接して鎮座する雄神神社と元雄神神社である。前者の主祭神はタカオカミ(高靄)・クラオカミ(闇靄)でこれにセオリツが配祠されており、後者は逆にセオリツが主祭神で、タカオカミが配祠となっている。「雄神」とは、オカミ神のことであることは言うまでもない。難しい字の靄を雄神などと書くのは、神名としても、社名としても、他にも多くの

例がある。このような場合「元」の付いている方がもともとあった古社を意味するので、これらの祭神が正しく伝承されているのであれば、セオリツ→オカミと変わったことになる。

一方先に示したようにセオリツはタギツにも変わっていると考えられるので、比咩神の変化には

比咩→セオリツ→タギツ

と、

(比咩)→セオリツ→オカミ

の二つのルートがあることになる。

しかしこのような変化は、全国一律に起こったわけではないようである。

4. 3 セオリツとオカミの全国分布

比咩神の中で最も早く祭られたと考えられるのは「单比咩」であるが、これは図3に示したように八幡系比咩神の発祥の地と考えられる福岡県と大分県には少ない。図4に单比咩から変化したと考えられるセオリツとタギツ单神を合わせて示した。両神は全国に分散するが、セオリツが福岡県にやや多いことを除けば、やはり北部九州にはそれほど多くはない。これに対してオカミ神は、既報で見たように福岡・大分の両県にまたがって集中するが、図5に示すように海を渡って愛媛県にも多く祭られている。

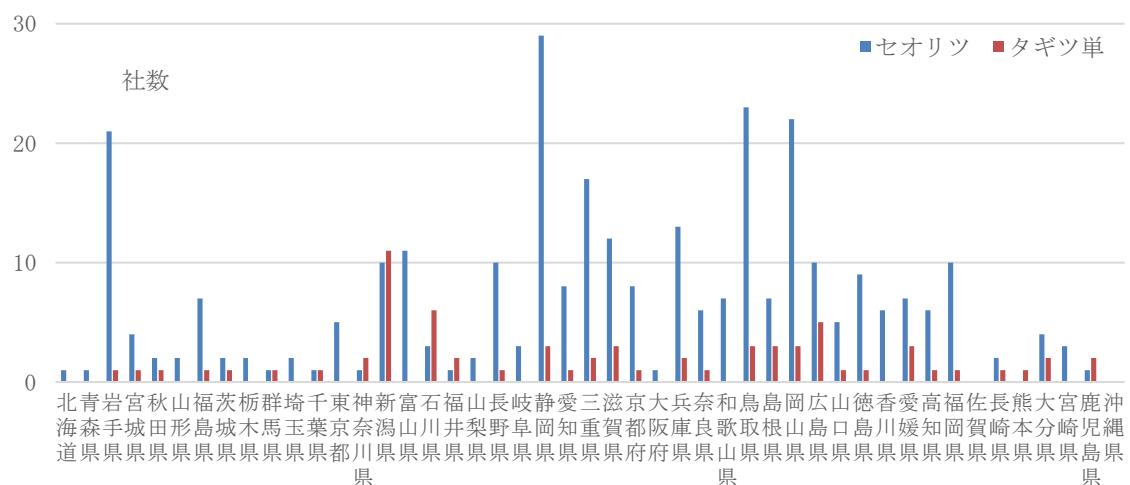


図4 セオリツとタギツ単神を祭る神社数の全国分布

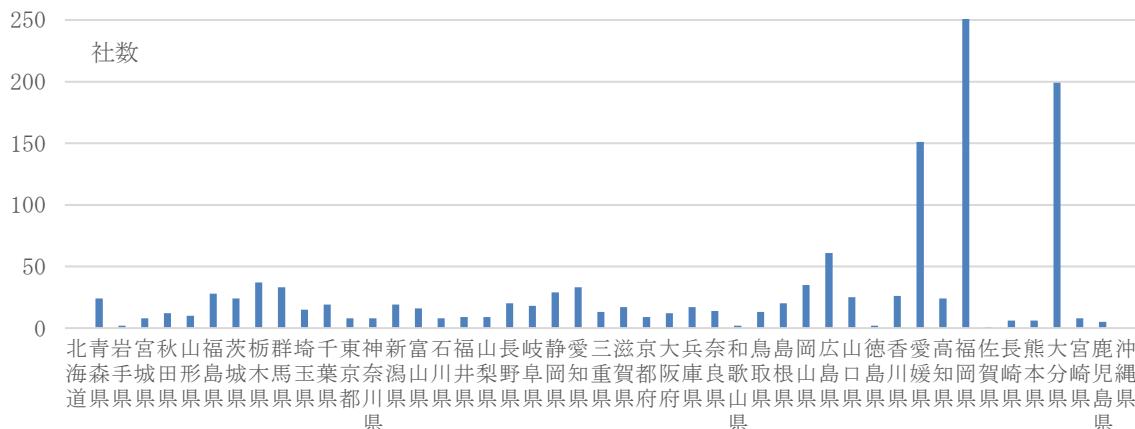


図5 オカミ神を祭る神社数の全国分布

このように西日本に多いオカミ神の分布を、郡単位で見たのが図6である。この図には、上記三神の分布を重ねて示した。オカミ神は四国では愛媛県のみに集中して祭られ、北部九州のオカミベルトと繋がっていることがわかる。一方中国地方では北九州に近い西端部と広島県と岡山県の県境を挟んだ地域から鳥取県西部にかけてのベルトが見られるが、これは既報で見た宗像神集中域とほぼ重なっている。ここは中国山地の鉱物資源を北は日野川、南は芦田川と高梁川へと搬出する南北横断路であったと推定される。

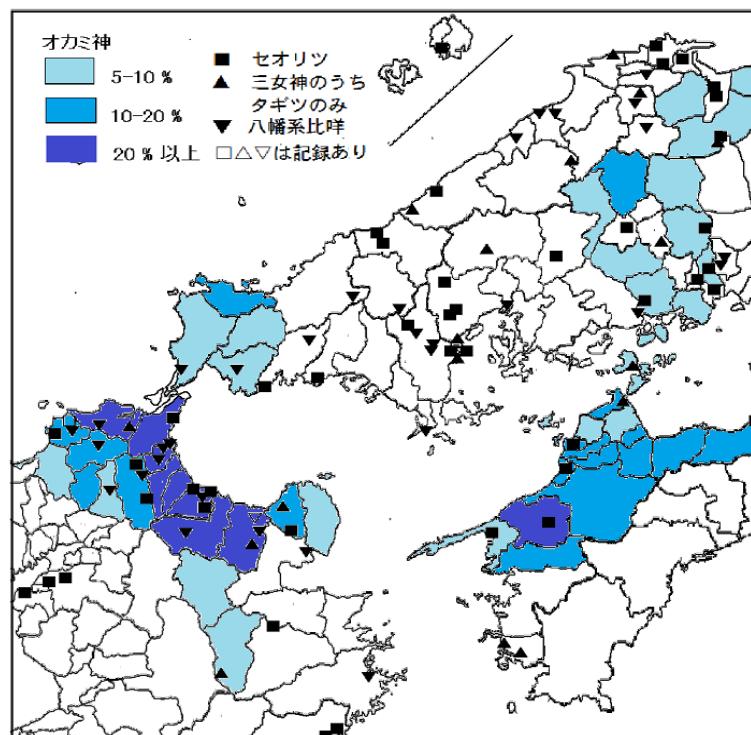


図6 北西九州と中国豊予地方におけるオカミ神を祭る神社の分布と
セオリソ・タギツ単・八幡系比咩の分布との比較

八幡系の単比咩とセオリツおよびタギツ単神は、北部九州ではほぼオカミベルトの中に収まっており、この四神の親近感が強いことが分かる。愛媛県では瀬戸内沿岸にセオリツが分布し、対岸の中国地方と呼応している。上記中国横断路にもセオリツが一部他の二神と共に分布するが、山口県と岡山県にかけての広い範囲のオカミ神空白地帯には八幡系比咩神が多少のセオリツやタギツ単神とともにかなりの密度で分布する。

対応する地域の宗像神の分布を図7に示した。上記オカミ空白域は宗像神の濃厚な分布域(注19)に重なっていて、その約60%が八幡神に共祭されている三女神である。この地域の宗像神は、対岸の宇佐から八幡信仰と共に伝播した比咩神が、大部分が現在の宇佐神宮と同様最終的に三女神へ変化する途中で、一部がセオリツ・タギツの段階で止まつたものと考えられる。四国でもおおむねオカミ神の分布は宗像神と一致しているが、オカミ神の少ない宇和地方南部で宗像神の密度が高い。ここにタギツ単神を祭る2社があり、対岸の豊前南部から日向北部にかけてのセオリツ神などの分布に対応する。豊予水道を挟んでの宗像神を祭る海人族による交流が示唆される。

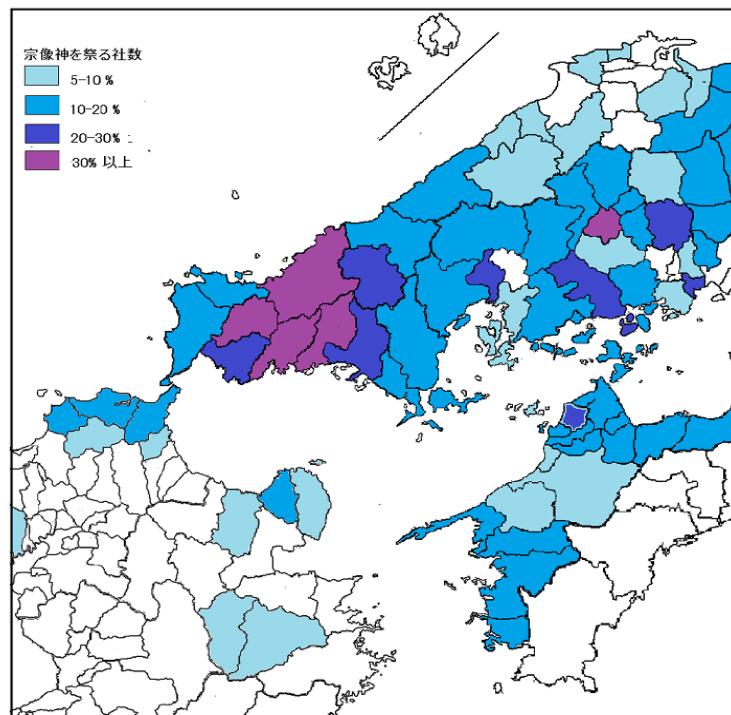


図7 北西九州と中国豊予地方における宗像神を祭る神社の分布

4. 4 比咩神等の分布の統計学的解析

比咩神とこれから変化したと考えられる三神について、各県の全社数に対する比を求めこれらを一括して図示したのが、図 8 である。四神を合計すると、それぞれの分布よりかなり均一化しているように見える。

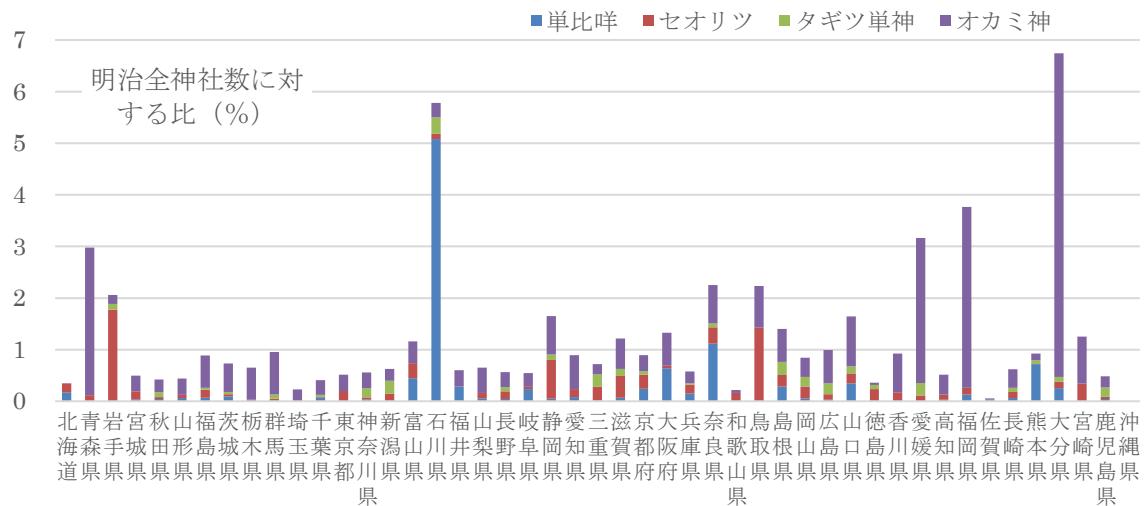


図 8 比咩から派生したと考えられる四神を祭る神社併せた全国分布

これを統計学的な手法で数値化してみよう。変数のバラツキの大きさを示す量として標準偏差(σ)を 变数の平均(\bar{x})で除した変動係数 CV が用いられる。

図 9 に国内の代表的な神々の都道府県分布の変動係数を、それぞれの神社数に対してプロットした散布図として示した。一般的な傾向として、その神を祭る神社が多いほど変動係数が低下する、すなわち分布が均一化する傾向が認められる。この傾向を対数関数の近似曲線で示した。天照大神(アマテラス)や稻荷神社の祭神(倉稻魂などと表記)や全宗像神などがこの近似曲線上にあり、これらの神が祭神分布の平均的挙動を示すことが分かる。一方八幡神(ここでは応神天皇とその別名の神を祭る神社)はこの曲線の下にあり、最も普及しているこの神が国内で最も均一に祭られていることを示す。

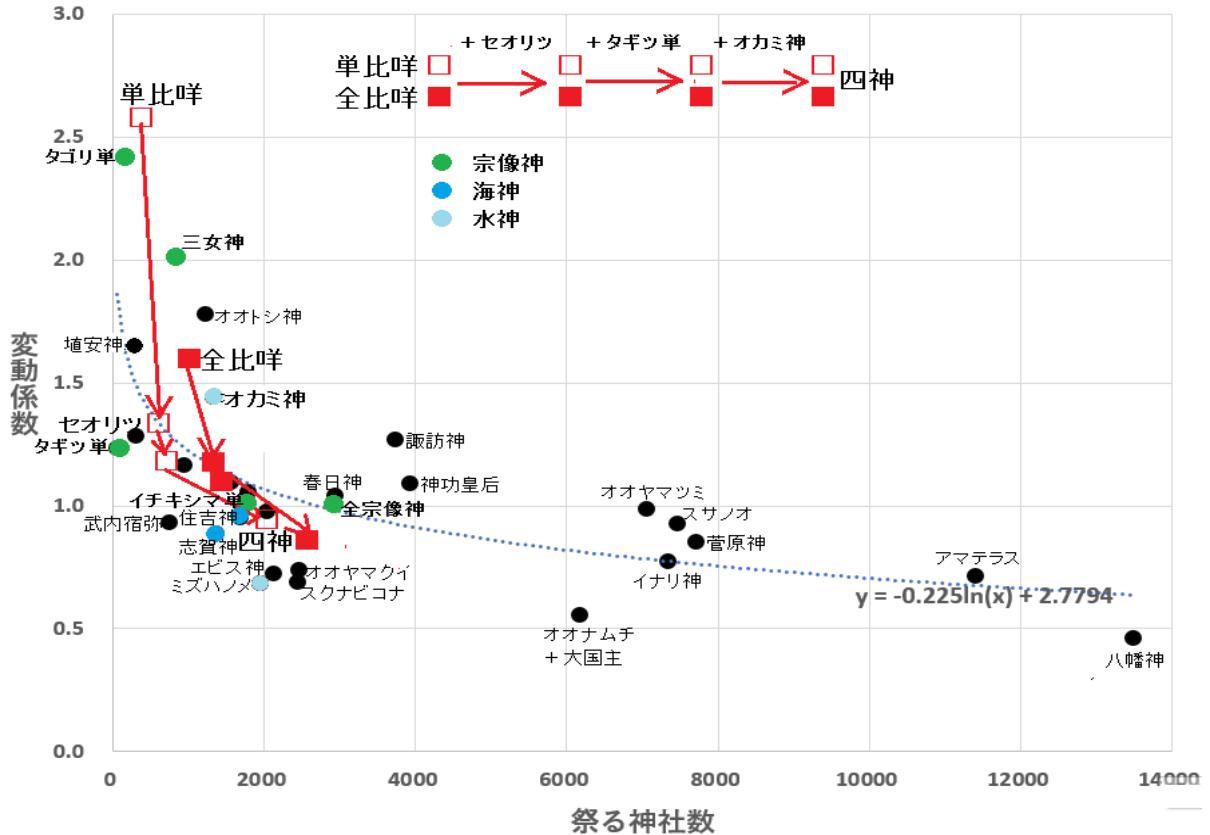


図 9 比咩神を祭る神社にこれから派生したと考えられる3神を祭る神社を加えたときの変動係数の変化と主な他の祭神との比較

これに対して本報で検討して来た四神の分布を見ると、出発点と考えられる比咩神は、図 3 で見たようにかなり偏った分布を示す。特に宇佐神宮で当初祭られていた比咩(大)神(单比咩として示す)の偏りが大きい。ところが前報で推定した変化の順序に従って他の三神を加えて行くと、四神では近似曲線からかなり下にプロットされる。図 8 で見た分布の均一化が、数値的に確認された。

宗像神について見ると、既報[7]のように栃木県に偏ったタゴリ单神(宗像神のうちタゴリのみを祭る神社)の偏りが特に大きいが、三女神セットもバラツキがかなり大きく、宗像神の三女神化が全国的ではないことを示す。これは三女神がそれぞれ別の起源を持って各地に祭られていたものが記紀神話の成立とその普及により三神化されてきたに拘わらず、旧来の祭神をそのまま伝えてきた神社がかなり残っていることを示すと思われる。三神の中ではイチキシマが近似曲線の下にあり、この神が広く全国に普及していたことを示す。

5. 邪馬台国連合の成り立ち

5. 1 龫棺文化圏から銅矛埋納文化圏へ

既報[8]で九州北部の埴安神の分布が、旧龍棺文化圏と重なることを見た。そしてそれが、後年の邪馬台国連合にほぼ特定されている国々と重なることを見た。しかし龍棺葬は弥生時代後期に入ると終息に向かい、東への拡散は日田の辺りまで止まって宇佐には届かない。

龍棺葬に続く博多湾岸地域から出発する代表的な文化は、銅矛の地中埋納である。弥生時代前期に朝鮮半島から北部九州にもたらされた武器形青銅器は、列島に入ってから様々に形を変えながら西日本全体に普及した。はじめは首長層の権威の象徴として墓に副葬されていたが、次第に共同体の祭器として墓や生活遺跡と離れた場所に埋蔵されるようになった。出雲荒神谷の埋納銅剣はよく知られた例である。

博多湾岸地域では銅矛が最も高位の祭器となり、その大型化が進んだ。この中広・広形銅矛を埋納する文化圏は、図 10 に示すように龍棺文化圏からさらに拡がり、東方では豊前・豊後に四国に到達する(この図は武末純一[30]の図を改変しその後の出土例を付け加えて作成した)。このように奴国を出発点とする銅矛祭祀文化圏が豊前・豊後に広まることによって、邪馬台国連合成立への道が開けた。ところがこの図で明らかなように、ムナカタを中心とする筑前東部はこの波に呑み込まれことがなかった(注 21)。ムナカタのこの独自性が、のちに沖ノ島祭祀による新交易連合の拠点となることに繋がる。

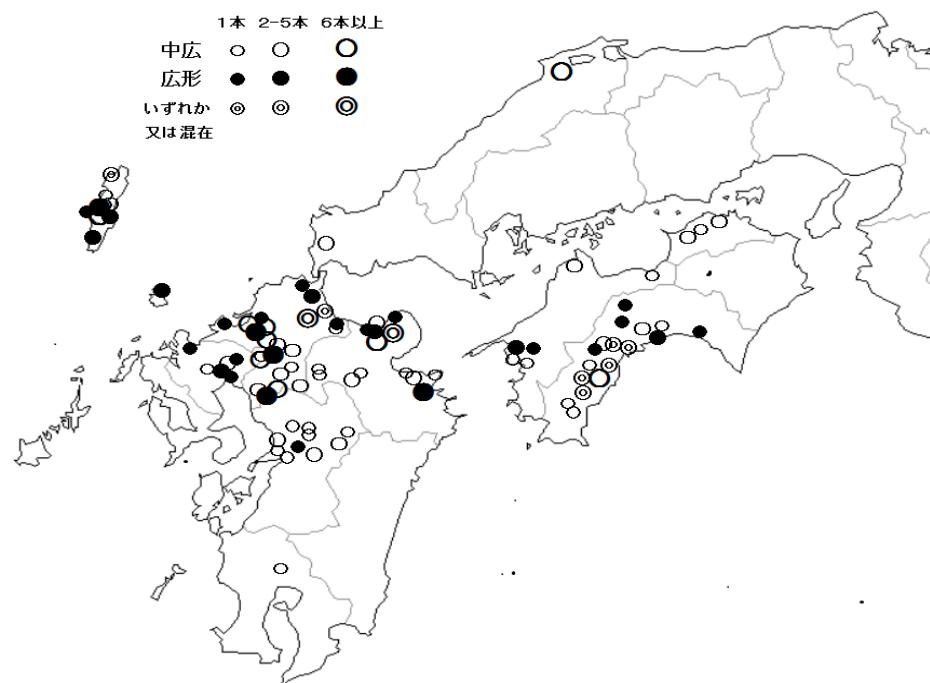


図 10 弥生中期後半から後期の埋納銅矛の出土分布

武末純一[30]のデータにその後のデータを加えて作成

この図で、中国地方の大部分や四国中部・東部はほぼ空白地帯となっている。弥生中期後半を中心とする中広形銅矛が瀬戸内沿岸でいくつか出土するが、それに続く後期の広形銅矛は全く見られない(以下青銅器の年代観については北島大輔の整理による[32])。この理由は、図11を見れば分かる(注22)。この図は、この時代の各種青銅祭器の分布を総括して示したものである[33]。瀬戸内沿岸には、中期後半から後期前半にかけて平形銅剣を祭器とする文化圏が成立していたため、広形銅矛が入らなかったと考えられる。一方徳島県と高知県東北部に銅矛が入らなかったのは、畿内の銅鐸祭祀とその埋納を行う文化の波及によることが読みとれる。

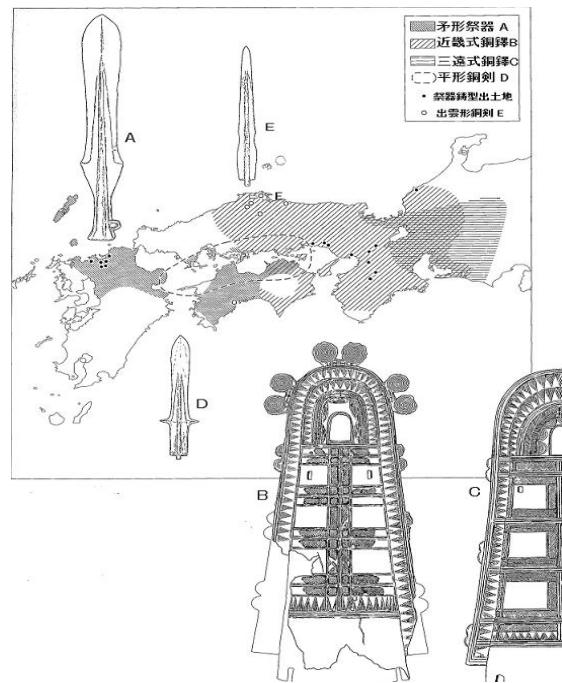


図11 弥生中期後半から後期の西日本の祭祀青銅器の分布(文献[33]の図を改変)

5. 2 四国に伸びた「埴安ベルト」

既報[8]で埴安神が筑前西部を中心とする地域に集中し、ほぼ甕棺文化圏と重なることを指摘した。この「埴安ベルト」はほぼ筑後で止まっているように見えたが、甕棺文化圏より拡大した銅矛埋納文化圏にそれが引き継がれていないのだろうか。図12は、図10で埋納銅矛の集中する地域での埴安神の分布を見たものである。記紀で埴安神と同一神と読みとれる埴山神(注23)も併せて示した。北部九州以外では埴山神の比率が多くなる。

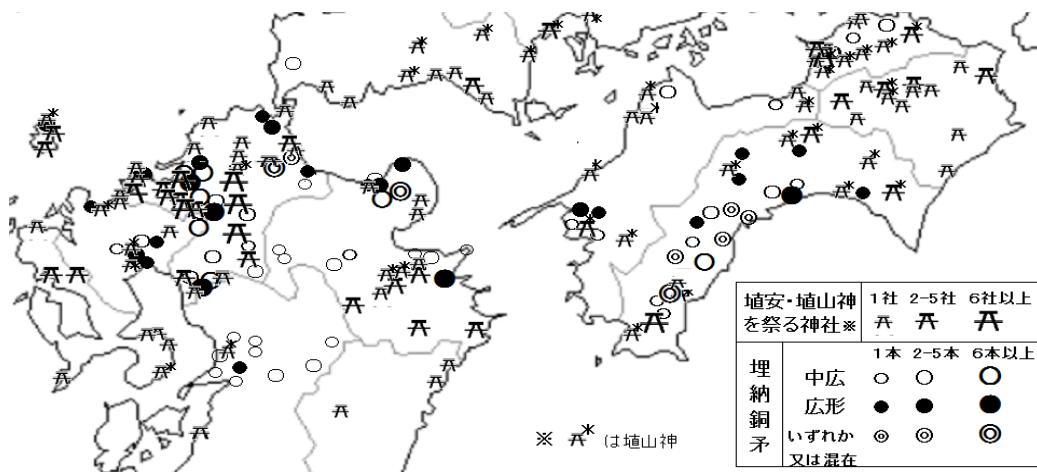


図12 弥生中期後半から後期の埋納銅矛の主な分布地帯における埴安・埴山神を祭る神社の分布

この図を見ると、埴安神は少ないながら豊前にも祭られていて、豊後では大野郡を中心にかなりの数の神社に祭られている。これは埋納銅矛の分布とある程度重なる。そして海を渡って四国南部特に高知県西南部に多く、ここでも埋納銅矛の分布に重なる。高知県では東部に埴山神が分布し、埋納銅矛の分布と一部重なっている。

銅矛埋納の分布を全体としてみると、筑前西部と筑後平野北西部にかけてのコアの地域は中広から広形まで出土するが、そこからの拡散の段階では中広がまず面的に拡がり、広形になるとその周辺をフロンティア的に縁取るように見える。埋納の目的が、農業共同体の祭祀から他文化圏との境界での勢力圏を示す呪術的な意味に変化していったのではないか。

福永伸哉[34]は、この時期の銅矛文化圏と銅鐸文化圏のせめぎ合いは、当時瀬戸内海を通る交易ルートが機能していなかったため、畿内の勢力が鉄などの輸入のため太平洋ルートの開拓を狙って四国に進出したためと考えている。古墳時代に入り瀬戸内ルートの大動脈が開通すると太平洋ルートの構築の必要性が失われ、同時にいざれの青銅器祭祀文化も衰退化することになった。既報[8]で触れたように、瀬戸内ルートの開通には沖ノ島祭祀開始との相関が考えられる。

5. 3 邪馬台国への道は銅矛文化圏が用意した

[附論]で詳述した帶方郡から邪馬台国への道は、銅矛文化圏とほぼ重なる。まず朝鮮半島では、狗邪韓國の中心金海市で、2世紀を中心とする大遺跡良洞里古墳群などから、日本製の中広形および広形銅矛が計6点以上出土している[35]。

海を渡った対馬では、図10に見られるように埋納銅矛が大量に出土している。その中心は、「倭人伝」の対馬国の中心と考えられている浅茅湾北岸であり、なかでも豊玉町の佐志賀黒島では、15本の広形銅矛が一括して出土している。図10に示されていない石棺等からの出土例では、北島西岸の木坂からの6本が目立つ。東岸の比田勝湾を望む尾根先端にある塔ノ首石棺群では、4本の広巾銅矛が、銅剣・楽浪系の銅鉈・朝鮮半島の土器・後漢鏡など、国際色豊かな副葬品に混じって出土している[36]。明らかに銅矛埋納文化圏とは異なり威信財の一つとしての扱われ方で、既報[8]で触れたように邪馬台国連合とは異なる交易ルート(ムナカタルート)の拠点が東海岸に存在していたことを示唆する。

壱岐では勝本で中広銅矛が出ているが、この熊野神社に埴山姫が配祠されている。原の辻周辺では銅矛が見付かっていないが、埴安神はその周辺の4社に祭られている。博多湾に渡って、湾口近くの唐泊の海岸で広形銅矛が見付かっているが、それに続く旧海岸線に沿って西区の太郎丸・女原・今宿・姪浜と計5社の埴安神を祭る神社があり、糸島市や福岡平野部の多くの埴安神を祭る神社に繋がっている。

博多湾岸から筑後北部にかけての埴安—銅矛文化の中心から豊前・豊後へ出るには、2つのルートが使われたようである。一つは、奴国勢力が筑豊に進出する足がかりとなった石包丁製作の立岩遺跡群(飯塚市)附近から筑豊南部を通って香春—赤村から周防灘に出る道である。8社の埴安神を祭る神社が、飯塚市から東隣の嘉麻市にかけて分布し、その東の田川郡糸田町の1社に続くが、糸田町では

10 本の銅矛が発見されていた。ここから英彦山川の支流御祓川の谷を赤村まで遡ると、峠らしい峠もなしに周防灘に注ぐ今川の上流に移ることができる。この「赤回廊」が古代きわめて重要視された交通路であったことは、安閑天皇 2 年(533)にこの回廊に沿って桑原屯倉(田川郡大任町とされる)と我鹿屯倉(同赤村とされる)が置かれ、周防灘側に勝崎屯倉や肝等屯倉が置かれたことでも分かる(上記飯塚市と嘉麻市にもそれぞれ穂波屯倉と鎌屯倉が置かれた)。周防灘に出ると行橋市に 2 本の銅矛が伝世されているが、ここでは 3 社が埴安神を祭る。

一方筑後平野では朝倉市(旧甘木市)で 3 本、うきは市で 4 本の中広銅矛が出土している。ここでは埴安神を祭る神社がきわめて多く、朝倉市には 38 社(うち旧甘木市に 22 社)が残っている。[附編]図 21 では、周防灘沿岸に出る道筋について日田から峠を越えて山国川流域に入る道を陸行①とした。日田では中広銅矛が 2 本伝世されているが、それから周防灘に向かう道筋がはつきりしない。むしろ筑後川とその支流玖珠川の川筋に中広銅矛が出ていて、これから大分県側に出たように見える。これを陸行②とした。ここから近い宇佐市の安心院盆地の 2 カ所で 9 本以上の銅矛が出土しており、ここから駅館川を下った宇佐神宮に近い法鏡寺の 2 カ所で計 3 本の広形銅矛が出土している。

一方別府湾に注ぐ大野川の上中流域には 13 社もの埴安神を祭る神社があつて、これを下った大分市内では 2 カ所で計 6 本の中広銅矛が出土している。そして大野川流域から東に山を越えた臼杵市井村では、広形銅矛 7 本が出土した。ここは伊予へ渡る絶好の港である。そして対岸の宇和地方では多くの銅矛が出土している。四国への進出はこの方面からがメインルートだったと思われる。

「魏志倭人伝」には「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり。皆倭種なり」とある[11]。これは図 5 に見るように、邪馬台国が四国の倭人の国と文化交流があつたため記されたものであろう。「倭種」と書いたのは、四国の倭人の国が邪馬台国連合に属さず魏に臣従していなかつたからと考えられる。中国地方やその先の近畿地方の国への言及がないのは、邪馬台国との交流がなかつたためと考えられる。

5. 4 銅矛埋納文化圏の拡大と宗像神の関与

前節のような海を越えての文化の拡散には、海人の関与が考えられる。既報[8]で、北部九州の海神の中で宗像神の起源が最も古いと推定されることと、宗像三女神の中でもイチキシマ信仰の起源が古いと考えられることを見た。図 13 は北部九州主要部と中国・四国西部のイチキシマ単神を祭る神社の分布を旧郡単位で示したものである(比率表示が既報[8]の図と異なることに注意されたい)。この地域では八幡信仰が圧倒的に強いが、その場合宗像神としては殆ど三女神を祭るので、イチキシマのみを祭る神社はそれ以前から祭られていた神社である可能性が強い(注 24)。

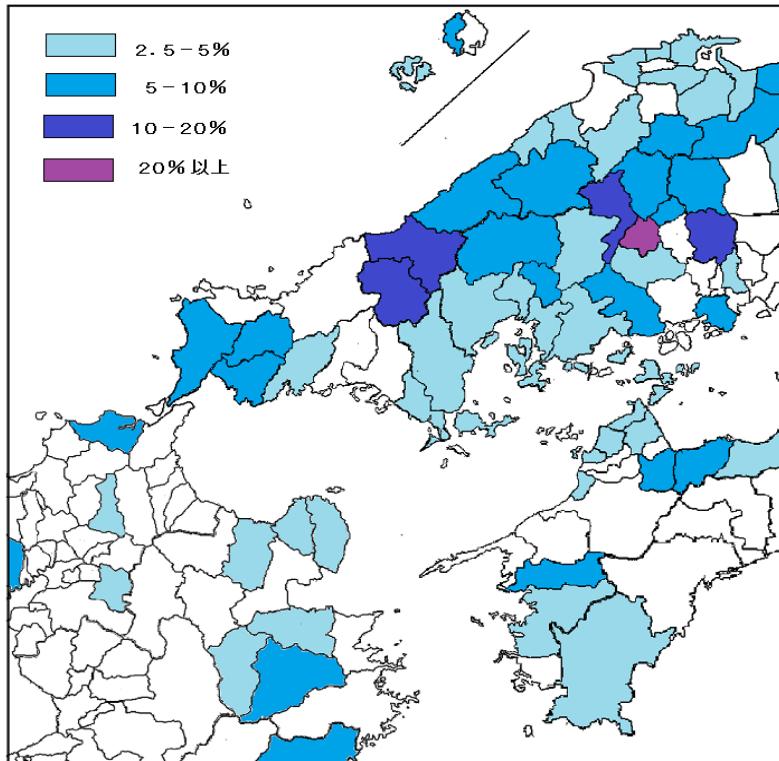


図 13 北西九州と中国豊予地域のイチキシマ単神を祭る神社の分布

埴安神の多い大野郡には、既報[8]で指摘したように三女神のうちイチキシマのみを祭る神社が非常に多い。そしてこれに呼応して対岸の宇和地方とこれに続く高知県幡多郡にも多い。宇和からは四万十川流域に出る古代交通路があったと見られる。四万十川中流の高岡郡四万十町の窪川台地からは、18 本もの銅矛が発見されている[37]。なおここには『日本書紀』で三女神と共に化生した五男神のうちの二神天津彦根と活津彦根という珍しい神を祭る多くの神社もある(次報で詳述)。ここから太平洋に出た旧高岡郡の土佐市には、古い宗像神社が現存する。なお神社明細帳(注 25)で調べると高岡郡には明治初期には 45 社の宗像神を祭る神社があり、うち 33 社がイチキシマのみを祭っていた。

しかし図 13 から見るとイチキシマ信仰の拡散は日本海沿岸がメインであったようで、山口県西部を起点に既報[7]で見たように江の川や日野川を遡って山陽に達したと見ることができる。その途中で河川交通の重要な拠点のあった広島県旧三峪郡などに、イチキシマを祭る人々が集住していたのであろう(ここには現在も宗像神社がある)。

このように、イチキシマを祭る古代海人族は文化圏の違いを超えて、沿海海運から内陸水運まで含めて全国で活動していたと思われる。既報[7][8]で見たような全国的な広い分布と他神との分け隔てのない親和性は、そのような総合商社的活動の結果と思われる。

6. 卑弥呼の鏡

6. 1 銅鏡祭祀の始まり

「魏志倭人伝」には銅矛も銅鐸も出てこない。魏帝が「汝の好物」と言った下賜品には鏡 100 枚が含まれていた。「鬼道に事え、能く衆を惑わす。」と書かれた卑弥呼が祭祀に用いたのは、銅鏡である可能性が強い。

日本で鏡が珍重されるようになったきっかけは、弥生中期はじめ頃朝鮮半島からの多鈕細文鏡の流入であった。この鏡は凹面鏡で姿見には適さず、はじめから祭祀用品であったと考えられている。国内で中期前半までに出土するのは、すべてこの鏡で、11 遺跡から 12 面が出土している(以下野内智一郎らの報告[38]による)。出土時期の明確な例はすべて甕棺文化地帯にある。原の辻・宇木汲田(長崎)・吉武高木(福岡)・梶栗浜(山口)の各遺跡では、朝鮮半島製の銅劍と共に出土している。同じく甕棺文化圏内の佐賀県小郡若山遺跡(2 面出土)は、水辺の祭祀遺跡と考えられている。遠方の奈良県・大阪府・長野県の例も墳墓からではないので祭祀品と考えられているが、埋納時期はいずれも明確ではない(注 26)。他地方の多鈕細文鏡は、北部九州からの人の移動とともに後年に持ち込まれたと考えるのがもっとも自然である。

6. 2 古鏡の時期ごとの全国分布

古代遺跡からの出土鏡(以下古鏡と呼ぶ)については、国立歴史民俗博物館が行った全国調査が 1990 年に公表され[40](以下『鏡データ集成』)、さらに 2002 年にその補遺が発行されている[41](以下『補遺 1』)。しかし目に触れる限り専門家による上記データの総合的な集計・解析が発表されていない(巻末補注参照)。これはデータの精度の問題があるためと思われる。ここに集成されたデータは、正式な発掘調査の報告に基づくものばかりではなく、古記録または伝聞に基づくものもあり、鏡の分類や出土年代等については、あらかじめ基準は示されているものの、原則として各地方の報告者に任せているため、地方差が見られる。このため学問的な解析には、さらに突っ込んだデータ吟味が必要と考えられているのであろう。しかし大まかな傾向を探るには十分なデータと思われる所以、これを用いて解析を試みた。関係分のデータを以下に示す。

この調査で収録された古鏡は、『補遺1』を含め 5025 面である。各県の出土時代別の面数を表 2 に示した。弥生時代の区分は、集成者の指定により近畿地方の土器形式変化を基準としている。一般的の表示では、I 期が前期、II ~ IV 期が中期、V 期と庄内式並行期(近畿地方で庄内式と呼ぶ土器が作られている時期)が後期に、それぞれほぼ相当する。このような時代区分を指定しているためか、特に弥生時代には時期を III - IV のように範囲で示している場合が多い。ここでは整理の都合上その範囲のうち早い方の時期で分類した。

表2 古鏡の時期別の全国出土状況

	弥生時代							古墳時代							奈良時代	平安時代	中世以降	不明	総計
	I	II	III	IV	V	庄内	弥生時代	弥生時代計	前期	中期	後期	終末期	古墳時代	古墳時代計					
北海道																		0	
青森県																		0	
岩手県																		1	
宮城県									4	3		2	9			1		10	
秋田県																		0	
山形県									1	2			3					3	
福島県									6	1	5	1	1	14				6	
茨城県									5	8	3	3	14	33				33	
栃木県									12	23	9		44					44	
群馬県									39	8	45		106	198			6	204	
埼玉県	1	1	1				3	5	7	16		7	35			2		40	
千葉県						3	3	47	19	17	4	10	97	1		7		108	
東京都						1		1	9	3	3			15				16	
神奈川県						1		1	16	3	2	4	9	34			4		39
新潟県									4	15	4		1	24			2		26
富山県						1	1	2	1	1			3	5				7	
石川県						1	5	2	8	8	11	2		2	23			1	
福井県									23	21	3	1	1	49				1	
山梨県									12	9	9	1	29	60				3	
長野県						1		1	11	36	34		17	98				19	
岐阜県						1	1	2	76	3	17	3	26	125	1			36	
静岡県									25	66	34		62	187			7		194
愛知県						2		2	48	15	15	1	1	80			7		89
三重県									29	17	17		83	146			43		189
滋賀県						1		1	31	24	6		24	85			6		92
山城						2	2	2	118	33	4		33	188			3		193
丹波						1	1	1	14	17	4		3	38				39	
丹後						1		1	15	16	6		1	38			2		41
京都府			1	3	4	4	4	147	66	14		37	264			5		273	
大阪府		7	6	3	16	137	67	9				19	232	1		17		266	
摂津		6	1	1	8	60	4	7				2	73			10		91	
播磨		3	4	2	9	44	23	8				10	85	1		6		101	
淡路		1			1	1						2	3			4		8	
但馬								23	4	11		17	55				4		59
兵庫県		10	5	3	18	128	31	26				31	216	1	1	24		259	
奈良県		1					1	264	75	16	3	6	364			1	72		438
和歌山県		1	1	1	3	4	22	8				12	46	1		8		58	
鳥取県		5	2			7	42	17	4			49	112				19		138
島根県		1				1	23	9	9	1	3	45				2		48	
岡山県		1	13	3	17	55	92	10			40	197			1	18		233	
広島県		10		1	11	34	44	5			17	100						111	
山口県	1		4	8	5	18	16	23	4	2	8	53						71	
徳島県				3		3	21	15	6		10	52				6		61	
香川県			1	2	1	4	60	5	5		11	81				14		99	
愛媛県		2	9	6	1	18	17	13	12	2	26	70				6		94	
高知県			4	1		5	1	3				4						9	
筑前西	1	85	29	65	5	8	193	51	37	8	1	12	109	1	1	2	18	324	
筑前東		10	3	26	1	6	46	19	65	7		9	100				20		166
筑後	2	3	4	16	1	8	34	16	15	7	2	3	43				5		82
豊前			2	28	7	3	40	27	15	3		3	48			2	13		103
福岡県	3	98	38	135	14	25	313	113	132	25	3	27	300	1	1	4	56		675
北	1	1	2	3	1	5	13	15	19	14		2	50				11		74
南	3	1	10	22	6	20	62	14	14	4		13	45				21		128
佐賀県	1	1	2	3	1	5	13	15	19	14		2	50				11		74
本島		1	1			4	6		2	3		4	9				6		21
対馬		4	2	7	2	5	20	2	2	2		2	8				6		34
壱岐		8	2	4		2	16			1		2	3				2		21

長崎県		13	5	11	2	11	42	2	4	6		8	20			14	76	
熊本県				22	0	13	35	14	23	11		23	71			15	121	
大分県				25	5	4	34	22	10	6		14	52			14	100	
宮崎県				1		1	2	3	25	14		38	80			43	125	
鹿児島県					3			3	3	2		3	11		1	7	22	
沖縄県			3												1		4	
全国計	1	7	116	58	283	93	103	654	1543	1007	456	29	794	3829	4	8	523	5025

鏡の総数は、福岡県が最も多く675面、以下奈良県438面、京都府273面、大阪府266面、兵庫県259面の近畿四県が続く。

図14に、弥生時代から古墳時代前期への出土数の変化を都道府県別に示す。弥生時代には福岡県とその他の九州北部諸県が断然多く、他の地方では非常に少ない。これが古墳時代に入ると近畿地方に急増し、福岡県と肩を並べる。弥生時代は1面しか出ていない奈良県では、特に増加が急激である。これを素直に解釈すると、鏡を珍重する人々が福岡県から奈良県を中心とする近畿方面に移動した、と見ることができよう。その移動は、弥生時代と古墳時代前期との間に起こっていることが分かる。弥生時代に多かった北部九州三県をより細かく地域別に見たのが図15である(時期が明示されている鏡のみ)。Ⅱ期の少数の鏡(上述の多鈕細文鏡)を除くと、Ⅲ期に筑前西部に突然多量の出土が始まり、V期にまた急増する。このあと見るように、これは特定の「王墓」に多数の鏡が集中したためである。ところがV期になると筑前東部・豊前(福岡県内)・坂県南部などの出土が増える。そして図15で見るように、少數ながら西日本を中心に関東・北陸にまで分布が広がる。なかでも、愛媛県・広島県・大阪府の出土が目立ち、瀬戸内海が他地方への流出の主ルートになっていることがわかる。なおIV期の愛媛県の二例と埼玉県の一例を除き、北部九州以外の出土はすべてV期以降である。

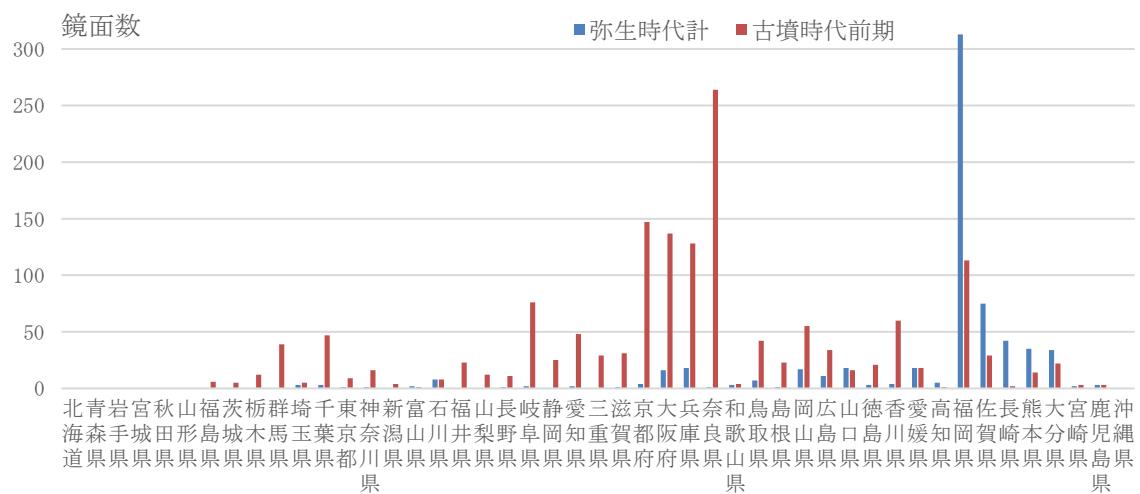


図14 各都道府県の古鏡出土数の弥生時代と古墳時代前期との比較

以上のようなデータを素直に解釈すると、弥生時代中期はじめに鏡を愛好する人々が筑前西部に現れ、九州島内でその嗜好を東方や南方に広め、弥生時代の終わり頃瀬戸内を東進し古墳時代初めまでに「畿内」に入り、そこからさらに全国にその嗜好を拡散させた、という図式が見える。

6. 3 漢鏡の異常な集中出土

弥生中期後半以降北部九州の国々から漢への貢献が始まると、多種の洗練された前漢鏡が入ってくる。漢は国直営の鏡の製作所(尚方)を持っていて、品質の優れた鏡が多く作られ、臣下や貢献してくれる化外の王たちに下賜された(以下主として高倉洋彰[42]による)。

日本ではまず糸島市の三雲 南 小路の1号甕棺墓に35面以上の前漢の鏡が埋葬される。漢の皇帝が王侯級の人物に下賜したと考えられるガラスの璧八個や金銅製の飾り金具など、豪華な副葬品も出土しているので、初代の伊都国王の墓と考えられている。このように多数の鏡が出土する墓は漢本国でも見られないので、倭人の鏡に対する嗜好がいかに強かったかがわかる。1973年からの発掘で1号墓に隣接した2号墓が発見され、ここからも22面の前漢鏡が出土した。時期は1号墓に続くもので、武器形青銅器がなく玉類のみが副葬されていたので王妃の墓と推測されている。

この両墓の中間に考えられる時期に、奴国王の墓と考えられている春日市須玖岡本D地点の甕棺墓がある。ここからも24面以上の前漢鏡が10数口の武器形青銅器などと共に出土した。

これに続いて飯塚市の立岩堀田遺跡で、10号甕棺から6面、他の甕棺と併せて合計10面の前漢鏡が出土した。この遺跡は、甕棺文化圏から外れて突出しているが、その進出の動機は飯塚市と若宮市との間にある笠置山から出る石包丁の原石にあったことが定説になっている。この時期筑前東部では、ムナカタを含めこれ以外に鏡の出土はない。筑前西部と佐賀・長崎県では、そのほかの14以上の遺跡を合わせ合計約230面の前漢鏡が出土している。弥生中期(III・IV期)には、上記甕棺文化圏(立岩を含めた)以外の出土はない。

6. 4 弥生時代後半鏡の拡散が始まる

前述のように、後期(V期)に入ると筑前東部や豊前に鏡が拡散する。ここでムナカタとの関係が出てくる。弥生時代中期後半、特に宗像市域では弥生遺跡が衰退する。これは海退により釣川入海の水運が不可能になったためと見られる(続報で詳述予定)。この時期に、宗像市域の南の靡山(296m)を越えた遠賀川の支流山口川沿いに新しい交易集落ができたらしい。九州自動車道工事に伴って、今の若宮インター周辺で汐井掛墓地遺跡が発見された[43]。ここでは弥生時代中期後半に始まり古墳時代初めまで続く371基もの墓が見つかっている。大部分は木棺墓と土壙墓であるが、石棺墓や石で蓋をした土壙墓もある。

ここから、青銅鏡の破片が六面分も出土した。なかでも弥生後期の石棺墓などから長宜子孫鏡（「長宜子孫」の銘のある内行花文鏡）・飛禽鏡など四面の後漢鏡の破片が出たことが、考古学界を驚かせた。国内では最古級の素環頭太刀などの鉄器も多い。宗像市の富地原や名残の丘陵にも、いくつかの弥生中期から後期を盛期とする遺跡群が発見されているが、その一つ徳重高田遺跡からも、内行花文鏡の破片が出土している[44]。

そのほかにもこの周辺に、この時期急に鏡が出土するようになる。遠賀川河口近くの響灘に突き出した遠見ノ鼻の西岸北九州市若松区の岩屋遺跡から後漢鏡四面を含む5面の鏡が、また八幡西区の馬場山遺跡から後漢鏡2面を含む4面の鏡が出土している。古墳時代の土器布留式が混ざる次の時期には、北九州市小倉北区郷屋遺跡とみやこ町の徳永川の上遺跡から後漢鏡の破片が出ている。後者では、後漢の内行花文鏡と方格規矩鏡のほかに、続く時代の三角縁の画像鏡・盤龍鏡が出ている。

遠賀川河口域周辺と瀬戸内海に面した豊前地方とのつながりが推定され、交易ルートの変化を窺わせる。

さらに宇佐では、駅館地域で出土していた後漢～三国時代の特徴を備えた銘帯を持つ斜縁六獸鏡（完鏡）が最近確認された[45]。前述の安心院でも、後漢鏡2面の破片が見つかっている[46]。

以上のように、卑弥呼に繋がる時代に遠賀川流域から宇佐を含む豊前にかけて、後漢鏡が続々と出土している。

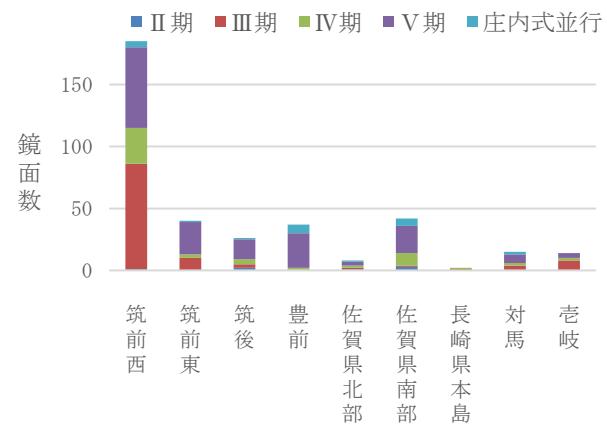


図 15 北部九州諸地域の弥生時代
時期別古鏡出土数の比較

6. 5 「卑弥呼の鏡」の出土状況

「魏志倭人伝」の景初2年（3年=西暦239年の誤りとされる）魏帝が卑弥呼に報じた詔書に記された下賜品の中に「銅鏡百枚」があることから、これがどの鏡であるかについての議論が続いている。中国社会科学院考古研究所所長を務めていた徐苹芳によると、魏は建国からまもなく、しかも戦乱の影響と魏の領域内の銅材の不足により、銅鏡製造は不振であった[47]。この時期の魏鏡は後漢鏡を受け継ぐ形式のものが多く、新しい様式のものは見られないという。もちろんそれまでの後漢鏡もかき集められたであろう。徐によると、時期的に卑弥呼に下賜された可能性が強い鏡は、

- ・方格規矩鏡
- ・内行花文鏡（特に蝙蝠鈕座）

- ・獸首鏡
- ・夔鳳鏡
- ・盤龍鏡
- ・双頭龍鳳文鏡(位至三公鏡)
- ・鳥文鏡
- ・鉄鏡

であるという(注 27)。

これらの鏡の殆どは日本でも出土し、『鏡データ集成』にこれらの名で示されている場合が多い。その出土地を、図 16 に示した。この図には、同集成の後に明らかになった出土例も、知りうる限り示した。方格規矩鏡類は前漢から作り始められ三国時代にも作られているので、後漢時代の代表的文様である方格規矩四神鏡のみを示した。内行花文鏡も、蝙蝠鈕座と明記されているものと「長宜子孫」名を有するもののみ示した。鏡は伝世(しばらく保有されてから埋蔵されること)が多くその場合は最初の受領地からの移動が考えられるため、この図では弥生時代(IV-V 期および庄内併行期)の出土例に絞った。このため該当鏡数が少なくなったが、おそらく舶載された鏡はより多く、そのうち古墳時代になって埋蔵されたケースが多いと考えられる。

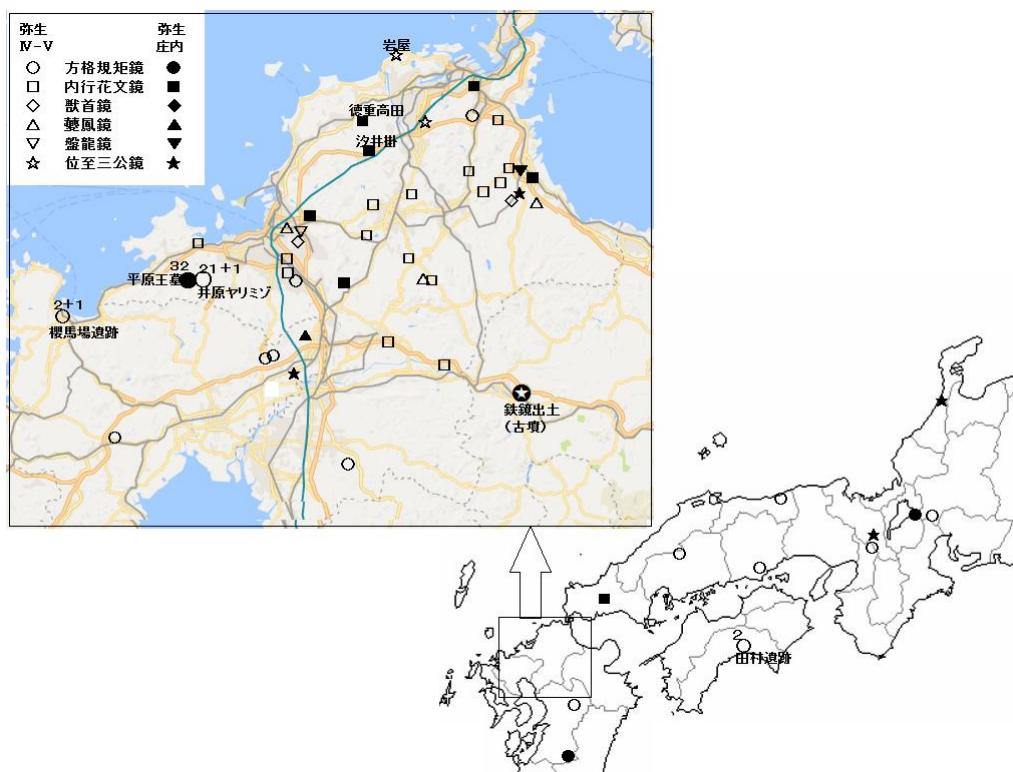


図 16 卑弥呼が受領した可能性のある中国鏡の弥生IV-V期と庄内併行期における出土分布

図 16 に見るよう、これらの鏡は弥生IV-V 期まではそれ以前と同じくほとんど筑前西部と佐賀県の隣接する地域から出土しているが、筑前東部と筑後および豊前にも目立つようになり、散発的に中国・四国にまで拡がっている。庄内併行期に入ると丹波・加賀にまで達している。このような遠方への伝播

には、宗像などの海人族の広域活動との係わりが考えられる。いわゆる畿内では全く出土せず、「王権」はおろか有力者も存在しなかつたことが推測される。

6. 6 超豪華な鉄鏡と「完璧」

後漢末から魏晋にかけて銅材不足の時代に王と周辺では鉄鏡が多く作られ、その中には宝石をちりばめた豪華なものが多く、後の魏帝曹操が後漢の献帝に献上したのもこのようない鐵鏡である[47]。まさにそのような鐵鏡(金銀錯嵌朱龍文鐵鏡)が、日田市から出土している。これは古墳からの出土であるが[50]、卑弥呼の時代にしか作られない重要な鏡と考えられるので、特に図 16 中に示した。

このような鏡は、上記曹操例のように特定の貴人に贈るため作られ、製作後直ちに贈与されたと考えられる。この時代に日本でそのような贈り物を受け取る可能性のある実在の人物は、卑弥呼以外には見あたらない。

鏡以外にも、当時王侯級の人物しか受領できない古代中国最上の宝物「玉璧」(国宝)が、宮崎県南端の串間市から出土している[51]。ガラス製の「璧」は伊都国の三雲南小路 1 号甕棺墓と須玖岡本D地点甕棺墓から破片が出ているが、本物の玉でできた完形の璧、すなわち「完璧」が、このような南九州の僻地にあったのは驚くべきことである。どのような事情でこの地に運ばれたかは不明であるが、前漢から後漢にかけての中国王朝と交流していた北部九州の国々の遺産を引き継いだものであることは間違いないであろう。邪馬台国が九州東海岸にあったとすれば、璧がこの場所で出土した意味も理解できるのではないか。

7. その後の卑弥呼と比咩信仰

7. 1 卑弥呼の争い

「倭人伝」には倭国で女王に統属する 29 カ国を挙げた後、「その南に狗奴国あり、男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属さず。」とする。この官の名はクコチヒクと読めるが、魏志の他の用字例から見てキクチヒコ、すなわち菊池彦を表したと考えるのが自然であろう。

菊池川の流域には、弥生時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が発見されている。なかでも中流域山鹿市の方保田東原遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての 35 基という全国屈指の規模の拠点集落(国史跡)である[52]。ここからは合計 10 面に及ぶ青銅鏡のほか、巴形銅器など熊本県内で最も多くの青銅器が出土している。数百点以上の鉄器と未製品、ベンガラ(赤色顔料で酸化第2鉄粉末)の生産に使用された石臼や土器片が出土した。青銅器や多くの地域からの搬入土器などから、鉄やベンガラで富強をなした勢力の存在が確実であり、強国狗奴国(高官菊池彦)が治めていた土地と考えて差し支えないであろう。

この周辺には他にも多くの弥生遺跡が発見されていて、出土している青銅鏡からは、弥生後期初頭から終末まで後漢鏡を含む鏡を継続して入手できていたことが推定されるという。最近はさらに出土数が増え、熊本県の弥生時代の鏡出土は後半から始まり。舶載鏡(大陸から輸入)20面、仿製鏡(国内製作)44面と福岡県に次ぐ数という。菊池川流域および南に接する白川流域、これを遡った阿蘇盆地は、この当時日本最大の鉄器とベンガラの生産地帯であったことが明らかにされている[53] [54]。この地方が鉄器とベンガラの生産によって、弥生時代後半急速に富と勢力を増してきたことが窺えるのである(注28)。

この当時、鉄器の量は武力・農業生産の両面から国力のバロメーターと考えられる。従ってほぼ現在の熊本県に当たるこの地域が、邪馬台国連合29カ国と張り合うことのできる強国狗奴国に相当すると考えるのは、ごく自然である。そうすると、邪馬台国連合の九州西岸の南限は、福岡県の南端筑後地方になる。

この争いには宗主国^{つく}の魏も介入し、「檄を為りてこれを告喩」した。これを伝えに来た魏の官「塞曹掾使」長政は卑弥呼の死後まで残り次代の台与の治世になって帰国したのであるから、一部始終を見届けたのであろう。しかしその結末は記されていない。しかし先述のように阿蘇を中心に熊本県に強い「比咩」信仰が残っていることを考えると、狗奴国側が卑弥呼の統治を受け入れる形で決着したのではないか。そうでなければ長政が卑弥呼の後継者台与の官人に送られて帰国することはできなかつたはずである。

7. 2 卑弥呼の死と墓のありか

上記「告喩」のあと、「倭人伝」は突然「卑弥呼以て死す。大いに冢^{ちょう}を作る。径百余歩。殉葬する者、奴婢百余人。」(冢は墓)と記す。この「以て」の意味について多くの議論がされている。争いが原因で死んだのではないかと考える人も多いが、ここではこれについての詮索は行わない。

ここで注目したいのは、まず卑弥呼の墓である。古代中国の一歩は両足の一歩で、大体1.4mということが一般的認識である。「径百余歩」は直径140m超の円墳を意味する。このように大きな円墳は、国内に存在しない。そうするとこれは大型前方後円墳の後円部を指すのであろうか。古墳時代初頭、九州にこれほど大きな前方後円墳は存在しない。これが邪馬台国九州説の弱点である。邪馬台国畿内説では、この墓を櫻井市の箸墓古墳と考える人が多かった。この古墳の後円部の径は、約150mである。しかし畿内説の考古学者の努力とマスコミの宣伝に拘わらず、これを卑弥呼の死んだ3世紀半ばに持っていくことは困難なようである。関川尚功によると、この古墳は4世紀後半を大きくは遡らないという[58]。関川は、この古墳のある纏向遺跡の調査[59]で土器の編年を担当した考古学者である。比較的最近この近くのホケノ山古墳(全長約80m後円部径約60m)が調査され、箸墓古墳に先行すると考えられるため注目を集めた。この古墳の埋蔵施設から出土した木材の¹⁴C測定を行った奥山誠義の報告によると、信頼できる資料での測定結果からは3世紀-5世紀の範疇に入り、中心は4世紀半ばという結果になった[60]。ところが信頼性の落ちるサンプルの測定結果を含む概報が1-3世紀と先行して報告されたため、大変古い古墳としてマスコミに報道され一人歩きをしてしまった。このようなことから古墳時代開始が2世

紀にまで遡るというような言説が流布されたが、やはり 3 世紀後半以降に始まるところが妥当のようである。すると卑弥呼の墓が見当たらないことになる。

7. 3 宇佐にあった卑弥呼の墓

しかし実は、その墓が宇佐にあると考えられるのである。

魏に貢献していた卑弥呼が、魏の薄葬令に従つたのではないかという指摘がある。『三国志』魏志の文帝 3 年(222)に、寿陵(生前に作る陵墓)は「山を利用して本体を作り、土盛りや植樹をすることはならぬ」(付点は筆者)[61]とある。魏皇帝に忠実な卑弥呼も、生前これに従うことを意識していたであろうし、実際にそうしようと考えていたのではないか。ではなぜ「徑百余步」の墓を作ったのか。

この謎は、宇佐神宮の鎮座する亀山の地形を見ると解ける。図 17 に見るように、亀山はほぼ前方後円墳の形をしていて、後円部の径を 20m の等高線で測ると、まさに径が 150m である。実際に周辺を歩いてみると、岩山でもないのに形が整い、自然そのままの山とはとても思われない。かつての入り海と思われる低地に突き出た半島状の尾根の先端が小山状となっている地形がもともとあって、この小山を多少成形して半球状にすることは、薄葬令に反しないと考えられたのであろう。そしてこれに続く尾根の部分を、多少削平して葬祭の場所としたと考えられる。こうして図らずも、前方後円墳の形が出来上がった。

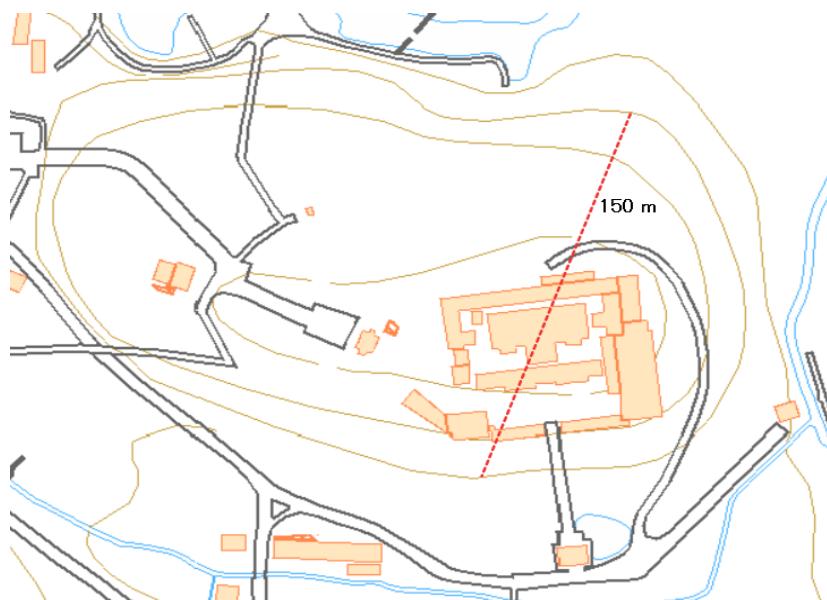


図 17 宇佐神宮社殿のある宇佐市亀山の地形(国土地理院地図使用)

亀山が前方後円墳ではないかという考えは、以前からあった。松尾則男の『おおいたの古墳と神社』[62]にそれまでの文献や伝承が紹介されている。なかでも宇佐国造直系の宇佐公康の『宇佐家伝承—古代が語る古代史』に、亀山が三世紀前半期の古墳であることが明記されているという。また作家の高木彬光も宇佐で調査を行いその結果を『邪馬台国推理行』に記しているが、推理小説として刊行されて

いるので専門家に無視されたようである。さらに松尾は、これまでに亀山から三基の石棺が出土しているという(その一つは宇佐神宮で手水鉢として使われている)。この山が古墳であることは、間違いない。

7. 4 ファッションとして広まった前方後円墳

九州の邪馬台国連合の有力者たちはおそらく卑弥呼の葬儀に参列したと考えられるから、この造墓法を直接見て真似たものと思われる。九州の初期の前方後円墳は、宇佐のすぐそば国東市の下原古墳をはじめ、小郡市の津古2号墳、福岡市博多区の那珂八幡古墳、糸島市の御道具山古墳と魏使ルートを通って、唐津市の久里双水古墳にまで達している。久里双水古墳の調査報告書[63]には、九州の初期前方後円墳が、大和地方のいわゆる纏向型前方後円墳とは形が異なり、しかも多様であることが指摘されている。これは初期の古墳が「亀山古墳」の形を直接真似たためで、多様性があるのは自然地形がそれぞれ異なるからと思われる。

では邪馬台国連合以外の国々、特に「畿内」などの遠方にまで急速に普及したのは、なぜなのか。

これを解く鍵は、日本の地形にあるのではないか。日本の多くの地域は、地質が比較的若く、従って山地は急峻である。このため河川の勾配が急で、しかも降雨量が多いため、両側の山地を削って痩せ尾根を作る。そしてその先端が、岬のように平野に出っ張る地形が日本各地に見られる。このような場所に、古式の前方後円墳が造られていることが多い。少なくとも古墳群シリーズの最初の古墳は丘陵の先端部分またはその尾根の頂上に造られているようである。

最近遠賀川流域の桂川町寿命で、九州大学と桂川町によって前期の前方後円墳金比羅山古墳が調査された。けいせんまちじゅめい 計測結果では、全長 80m、後円部径 45m である(平成 26 年(2014)9 月 21 現地説明会資料)。この古墳には葺石や埴輪がなく、墳形から前期でも古層に属する古墳と見られている。寿命には装飾古墳として有名な王塚古墳(全長 86m、6 世紀前半)があり、ほかにもいくつかの古墳があるので、この地方に根を張っていた豪族の奥津城の場所と見られるという。金比羅山古墳はその系列最古のもので、前期では遠賀川流域と宗像郡域を含めて最大の大きさである。調査担当の辻田淳一郎によると、その尾根の標高 88m の最高点を後円部とし、前方部は尾根の地形をほとんどそのまま利用し、前方部を成形するため削りだした土砂を、少し後円部に盛り土して造られたという。亀山古墳も、このようにして造られたであろう。

ムナカタの前期の前方後円墳のいずれも、このような展望を持つ尾根先端の小山を利用して作られている[9]。このことは、当時邪馬台国連合に属していなかったと考えられるムナカタが、宇佐と政治的なつながりがあったことを、必ずしも意味するものではない。邪馬台国連合に属する諸国は造墓法を直接見て真似たものと思われるが、その他の場合は、ファッションとしての伝播によるものではないか。

前史時代においても、律令制で人が土地に縛り付けられるまでは、現代と同様遠距離の文化交流が盛んであった。情報やファッションの伝播が人や物の移動よりさらに早かったことは、多くの例に見ることができる。たとえば遠賀川式土器は、非常に短い時間の間に分布域を広げたが、縄文的製造法でその形を真似た「遠賀川系土器」はさらに広く東北北部に到るまで拡散した。これは、直接の接触がなくとも、

ファンションが急速に伝播した一つの例と言うことができよう。そしてそのような文化伝播の主役を担っていたのが、宗像族に代表される海人であったであろう。早くから前方後円墳が築かれた東国の地方には、いずれも海人族が到達していたと推定できる。

宇佐に拠っていた卑弥呼の動静は、直接の関わりはなくとも当時の多くの人々の関心事であったことは想像に難くない。その卑弥呼が、ほぼ円形の小山とそれに続く尾根を活用した墓に葬られたことが情報として伝わると、財力のある豪族は競って真似をしたであろう。遠く離れた信濃で、千曲川を見下ろす尾根上に作られた変形前方後円墳の森将軍塚古墳も、痩せ尾根を苦心して利用した例である。

「ヤマト王権」が全国に支配力を持ち、前方後円墳の築造とその形式を規制したという議論がよくされている。しかしこの時期に、「ヤマト王権」の政治権力が、唐津市や糸島市などの僻地にまで浸透していたとは、とても考えられない。ましてや早い時期に前方後円墳が築かれた千葉県や会津盆地などには、まだ「ヤマト王権」の勢力が及んでいたはずはない。

畿内の初期の古墳を見ても、既報[7]で紹介した桜井茶臼山古墳が、まさに両側が川で削られた尾根の先端を利用して造られている。纏向でも少なくとも前記のホケノ山古墳は、扇状地の丘陵の先端部に造られている。その他の畿内の古墳群を見ると、大和古墳群の中山支群では丘陵の先端から順番に中山大塚—西殿塚—東殿塚と築かれ、菅生支群でも真っ先に丘陵先端にノムギ古墳が築かれる。大阪府の淀川流域西岸に築かれた多くの古墳群でも、ほとんど同様の順序になっている。向日丘陵尾根上の古墳群でも、最先端の元稻荷前方後方墳が真っ先に築かれ、摂津三島奈良原丘陵の三島古墳群でも先端にまず岡本山古墳が築かれ、それらの尾根の背後に続いて一連の古墳が築かれる。そしていずれの場合でも、平野部に突き出す尾根という立地適地が一杯になって始めて、平地に古墳が築かれるようになる。

前期後半以降有力者の古墳が巨大になっていくのは、すでに見晴らしのよい尾根上に築かれている古墳に対抗して、それと同等以上の視覚的効果をねらったためではないだろうか。前記箸墓古墳も平地に独立して造られていて、前方後円墳の本来の趣旨が忘れられた後世の古墳であることを思わせる。

前方後円墳出現の直前までは、大和盆地を含めて全国的に方形墓が卓越していた。九州でも伊都国の大原王墓⁸がそうであり、なにより宇佐にも多くの方形墓が造られていた。前方後円墳は、卑弥呼の墓から突然に始まり、一挙にファンションとして全国に広まったように見える。これはもともと自然地形を利用することで莫大な人力の投入を避けるためのものであったが、そのような適地は限られることもあり、次第にその趣旨が忘れられ莫大な労力をかけて平地にも築くようになる。特にヤマトには、古墳出現の時期に莫大な富が集中したため(注 29)、複数の広域豪族が競い合って本来の適地ではない場所にも多数の大型前方後円墳を築くことになったと思われる。

7. 5 殉葬から見える卑弥呼の出自

「倭人伝」で卑弥呼の死後に 100 人以上が殉死したという記事は、卑弥呼一派がかなり北方からの渡来人であることを推測させる。朝鮮半島でも3世紀の金海市の大成洞古墳群から殉葬が始まっている。

では殉葬の習慣はなかったので、北方民族による王権篡奪があつたことと考えられている。前記朴天秀[35]は、扶余からの侵攻を考えている。

この記事以前の日本には、はつきりした殉葬の証拠は見あたらないようである。朝鮮半島中南部の文化を取り入れた弥生文化には、殉葬の慣習はなかったと思われる。卑弥呼の一族は、北方系の慣習を持つ地域の出身と考えられる。

この時期以降殉葬の慣習が継続していたことは、『書紀』の垂仁天皇 32 年に皇后の死に際して天皇が野見宿弥の進言を容れて埴輪を以て殉葬に代えさせた記事から窺うことができる。

龜山で発掘された石棺からは顕著な副葬品の報告はないので、卑弥呼の墓の本体はまだ発掘されていないと考えられる。従ってこれらの石棺は殉葬者のものであった可能性がある。

7. 6 卑弥呼の遺したもの

卑弥呼は、「倭国乱る。相攻伐すること暦年。」という時期に王に共立された(注 30)。衆を惑わした手法は分からぬが、平和をもたらした巫女王であったことは間違いない。

卑弥呼からの派生名と思われるセオリツが主役を演ずる『大祓詞』は、セオリツがあらゆる罪を「罪といふ罪はあらじと」と山川の瀬から持ち出し、他の三神がそれを海で消してしまうというストーリーになっている。その罪としては、通常の刑法対象の傷害や近親との姦淫などの「国つ罪」のほかに、他者の田圃を荒らすなどの「天つ罪」が特に重視されている。天つ罪は、『日本書紀』にもアマテラスに対するスサノオの所行としてほぼ同様の内容が描かれている。このように農地の争いなどから起きる事件を「水に流す」のが「祓」であり、セオリツらはそれを司る神なのである。

日本では、原住縄文人に加えて、渡来人が幾次にも亘って来日し定住した。先着の氏族がよい条件の土地を占有したであろうから、後続の氏族との間に争いが起きたのは当然であろう。その後遺症が残らないように、祓を行って平和を実現するのが大祓詞の思想である。これは卑弥呼がもたらした「和」を、象徴的に示している。

邪馬台国があつたと思われる豊前豊後では、幾波もの渡来の波に加え、弥生時代後半に銅矛を祭器とする旧甕棺文化圏の人々が進出してきたため、先住の人々との間に摩擦が絶えなかつたと思われる。これがエスカレートして「相攻伐」にまで到つたのではないか。

卑弥呼はこのような倭国に平和をもたらしたため、死後も「和」の神として多くの人の崇敬の対象となり、比咩神として今も祭られることになったと思われる。この比咩のイメージを引き継ぐセオリツは、日本最古の祝詞の一つ「大祓詞」で全ての罪を祓え流す、日本の統一原理「和」を体現する神と言えよう。

この後日本が大和朝廷を中心として統一国家を形成することができたのも、この「和」による連合国家形成の成功体験があつたからと言えよう。

ただし卑弥呼の「和」は、徒手空拳の祈りだけで可能であったとは思われない。何らかの「もの」が必要だったであろう。先に述べたように、弥生中期後半伊都国や奴国の中は大量の鏡を入手していた。ところが後期に入ると、旧甕棺文化圏への鏡の流入が細り、一方で筑前東部から豊前に多くは破鏡であったが多くの鏡が流入するようになった。これは前漢末期から続く中国の混乱とこれに伴う朝鮮半島における漢の拠点(楽浪郡など)の変遷で公的流入ルートが不安定になる一方、一般的の交易ルートが活性化するようになったためと理解される。卑弥呼は威信財の入手困難で不満が溜まっていた奴国や伊都国の中の支配者層に、鏡などを提供できるルートを持っていたに違いない。

ひらばる
2世紀の終わり頃、伊都国の中の平原に 40 面もの大形鏡を副葬した墳丘墓(方形周溝墓)が久しぶりに現れる。しかもその中には、直径 46.5cm という世界最大の超巨大鏡3面が含まれる。柳田康雄の検討によるとこの鏡の多くは国内製ということであるが[67]、そうだとすると精巧な鏡を製作できる工人が来日していたことになる。卑弥呼はその招聘にも関わっていたのではないか。

7. 7 比咩神から湍津姫への道とオカミ神

本報で追求してきたタギツの起源について整理し、解明の手がかりになったオカミ神についてその起源を考えてみたい。

比咩から湍津姫に到る道を、改めて図式的に示すと次のようになる。

卑弥呼 = ヒミ(本名) + コ(尊敬の呼称)



比咩(ヒミ)神…原始宇佐神→八幡系・春日系・阿蘇系・平野系社の女神



女性・女神の尊称に「ヒメ」が普及→比咩もヒメと読まれるようになる



他の女神との区別のため比咩を瀬織津比咩に→白山比咩なども派生



ヒメと読まれるようになった比咩が比売・姫などとも表記される

(僻地や比咩信仰の強かった地域などには比咩が残る)



『日本書紀』編纂時に瀬織津比咩を湍津姫に

(セオリツが「ソウルの」を意味し対外的に支障があるための改名。『大祓詞』で瀬織津比咩を形容する「たぎつ」を新しい神名に)

もちろん途中の段階の神名も、各地に受け継がれて残っている。

おかみ
オカミ神は、前述のように富山県砺波市雄神神社と元雄神神社の例では、

セオリツ→オカミ

と変化したようである。これが前述の津屋崎波折神社の由緒書き(青柳種信書)に繋がる伝承と思われる。

しかしオカミ神は、『豊後国風土記』の直入郡球葦郷(現在の竹田市直入町や久住町の辺りと考えられる)の項に、景行天皇巡幸説話として「この村に泉あり。…泉の水を汲ましめんとす。すなわち蛇鼈あり。於箇美」という。』[20]の記事があり、正にオカミ神の正体を説明している。これから見ると少なくとも大分県では、セオリツからの転化以前にもオカミが水辺の龍蛇神として祭られていたらしい。白川静によると[27]、オカミの「ミ」は甲類で、カミの「ミ」(乙類)とは古代の発音が異なり、ワタツミなどと同じく渡来系の神に附く「ミ」である(注 20)。渡来系の人々が祭った水神と思われる。

一方日本古来の水神にミズハノメがある。これは水源を守る女性のイメージがある。ミズハノメは図 9 で見るようオカミ神よりもやや多く、そして全国に比較的まんべんなく祭られている。そして一般にこの二神が同時に祭られることは少ないが、福岡県ではミズハノメを祭る神社の 46%、大分県では 51% にオカミ神が祭られている。もともと水神を祭っていた社に重複して別な水神を祭ることは考えにくいので、渡来人の多いこの 2 県ではミズハノメを祭る社の多くに渡来人が自らの神比咩またはセオリツを併祭したが、後にその名をオカミに変えたと推定される。神名の変更を迫られたのはセオリツであったので(比咩神は宇佐神宮の神として 8 世紀の記録に残る)、このような場合併祭されていたのはセオリツであったと考えられる。

豊前の渡来人の多くは秦氏系であるが(注 8)、『日本書紀』雄略 15 年(471 との説あり)に全国の「秦の民」が 秦 造 酒 の統制下に置かれたという記事が載る。この伝統があるため豊前では、中央の氏族長の指示に忠実に従って、神社の祭神名を一斉に変えたと考えられる。これが比咩信仰の中心地の豊前に、比咩神やセオリツが殆ど残っていない理由であろう。

以上のようにオカミ神には、はじめからこの名で祭られていた場合と、セオリツ経由でオカミになった場合との両方のケースがあったようである。

8. 終わりに

本報の研究の目的は、宗像三女神のうち前報までに解明ができなかったタギツ(湍津姫)信仰の起源を探ることであった。

手がかりは、現在宇佐神宮に祭られている宗像神である。八幡神信仰成立以前から、宇佐附近では「比咩」という名の女神が祭られていた。比咩の名が付く女神は、現在も広く全国に分布し、900 社以上で祭られている。そしてこの女神には、姫・比売などが名に付く他の女神に比べ、特別の敬意が払われているようである。なかでも、八幡系社・春日系社・阿蘇系社など 350 社以上では、かつての宇佐神宮と

同じく比咩(大)神という名で祭られている。これは現在ヒメと読まれる「比咩」が、一般的な女神の敬称ではなく、もともとある神格を示す固有名詞であったことを示唆する。

「咩」という珍しい字にはミまたはビという音しかないので、現在ヒメと読まれている「比咩」は、本来ヒミと読まれたと推定される。この表記に対する歴史的に強いこだわりも、このことを示唆する。

ヒミの名は、邪馬台国の女王卑弥呼を連想させる。呼(乎)はもと神を呼ぶとき強く発音される声で、崇敬の意を込めて「ヒミコ！」と呼んでいたのが記録されたと考えることができる。この推論を裏付けるため、[付編]で邪馬台国的位置の検討を行った。「魏志倭人伝」に記す魏使の邪馬台国への行程を先入観なしに読み、地形や当時の交通事情、および魏使のミッションを考慮すると、宇佐付近が邪馬台国の中核である可能性が強いことが示された。

既報で埴安神がベルト状に博多湾岸から筑後地方まで濃厚に分布し、これが弥生時代前半の甕棺文化圏と重なることを示したが、この地域は邪馬台国連合の有力国奴国と伊都国を含む。弥生時代後半に入ると、この文化圏は銅矛埋納文化圏となって、宇佐を含む豊前・豊後に拡がり、さらに四国に伸びる。この拡大された文化圏が、邪馬台国連合成立の土台を築いたと考えられる。

伊都国と奴国には弥生時代中期後半多数の中国製の銅鏡を副葬する厚葬甕棺墓が出現し王権の成立を示したが、後期に入るとこの地域の漢鏡流入は減少し、一方遠賀川流域から豊前地方での出土が顕著になる。これは後漢末期の中国の混乱で倭の国王たちと中国王権との間の絆が断たれたことを示し、倭の諸国の王権の不安定化を招いたと思われる。このため倭の諸国間の争いが起り、その混乱収拾のため卑弥呼が倭の連合国の中核として共立されることになった。

後漢滅亡後建国された魏が、地方勢力公孫氏が支配していた楽浪郡と帶方郡を接収するやいなや、卑弥呼は郡を通じて魏に遣使し朝献を求めた。魏帝はこれに答えて優渥な詔書と多量の豪華な品々を下賜した。このことは卑弥呼の王権を盤石にしたと思われたが、数年のうちに倭国最南端に位置する狗奴国との争いが起きた。ほぼ熊本県に相当すると考えられる狗奴国は、阿蘇の豊富な鉄鉱資源をもとに急速に経済力を高めていたと考えられる。

この争いの頃卑弥呼が長い生涯を閉じ、現在宇佐神宮のある龜山に葬られた。この小山は低地に突き出した尾根の先端にあり、これを多少成形して円形の墓山としたと考えられる。これは魏の文帝がそれ以前に発していた薄葬令に従ったためであろう。この小山の直径が、魏志倭人伝が記す墓の大きさと一致している。そして葬祭のため続く痩せ尾根を削平したので、結果的に前方後円墳が出来上がった。この墓形が、卑弥呼に対する強い崇敬の念のため多くの有力者に模倣され、ファンションとして瞬く間に遠方まで拡がったと考えられる。

卑弥呼は、小国がひしめき合っていた倭国をまとめ、少なくとも 50 年以上にわたる平和をもたらした。その後日本が一つの国家としてまとまつたのも、卑弥呼のもたらした「和」の経験が記憶に残っていたからであろう。そして中国とのコミュニケーションが円滑で、先進的な文物の導入と日本の国際的地位の向

上に大きな功績を残した。このような人物が、日本の歴史史料や神の名に見えないのは不思議であった。

しかし本報の解析で、卑弥呼に対する崇敬が根強く残っていることが明らかになった。それは、本名の「比咩」神として、派生名の瀬織津姫として、それからさらに名を変えて宗像三女神の湍津姫としても残っている。宗像から筑豊・豊前にかけて数多く祭られてきた水神の靈神にも、その崇敬は受け継がれている。

冒頭に述べた宗像三女神「宇佐嶋」降臨神話は、この湍津姫の由来を示すものだったのである。

これで沖ノ島祭祀の謎を解く土台が出来上がった。次報では、誓約神話の考察から宗像三女神とヤマト王権との係わりを追求し、沖ノ島祭祀開始の謎に迫りたい。

【注】

- (注1) よく知られているように、古代中国の晋の人陳寿が撰んだ『三国志』の魏志中に東夷伝がありその中に異例の長文の倭(日本)の紹介(倭人条)がある。これを「魏志倭人伝」と通称するので、本報でもこれに倣つた。読み下し文は岩波文庫版[11]による。東夷伝中のほかの項目については、ちくま学芸文庫版の訳文[12]によった。
- (注2) 神に位を授けた最古の例は天武天皇元年(673) 壬申の乱で大海人皇子軍を助けたという大和の二神に対するものが最初というのが通説であるが、このときは位階制度が整っていなかったので具体的な位階は分からぬ。
- (注3) 宗像神社史[14]によると、天元元年(979)の太宰官符に宗像神社が藤原純友の乱(974)平定後に正一位勲一等に昇叙されたことが記されている。
- (注4) せんだいくじほんぎ
平安初期の成立とされる『先代舊事本紀』[18]中の国造本紀にも、神武天皇が宇佐津彦を宇佐国造に定めたことが記されている。国造本紀は記紀にない独自の伝承を伝えている貴重な史料である。
- (注5) 本宮は比咩大神とともに応神天皇と神功皇后を祭るが、いずれも宇佐神宮からの後年の勅請である。
- (注6) これら祭神は記紀にも現れないし、他神社に殆ど類例がないためその実像についてさまざまな説がある。ここではその全てに触ることはできないが、忍骨命は既報[9]表1に見るよう、皇室の祖先神正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊と同神であることが『日本書紀』から明らかである。また『豊前國風土記逸文』に田河郡鹿春郷の項に、「昔者、新羅の國の神、自ら度り到来りて、此の河原に住みき。便即ち、名づけて鹿春の神と曰ふ。」[20] とあるのでいずれかが新羅からの渡来神であることは確実で、その名から辛國息長大姫大目命が最も確からしい。ただし息長は神功皇后のもととの姓であるので、神功に当てる人も多い。

逸文はこれに続けて郷の北の三つの峯に竜骨(石灰石中の化石を示すと考えられる)があり、二の峯には銅を産することを述べているので、この説話全体の信頼性は高い。

(注7) 放生会は養老4年(720)の隼人征伐後に多数の隼人殺害の減罪のために始められたという伝承があるが、中野幡能[17]は、それ以前から行われていた銅鏡奉上儀礼に仏教の放生儀礼が結びついたものと考えている。

(注8) 辛島氏は古代の渡来系最大氏族の秦氏系と考えられている。推古16年(608)に隋の煬帝が裴世清を倭国に使わしたが、その報告に「筑紫から東に行き秦王国に至った」との記述がある[11]。秦の始皇帝の末裔と称する秦氏系の人々が多く住んでいたため、このような表現になったと考える人が多い。秦氏は、古代最大の渡来氏族である。ハタという名は古代朝鮮語の海の意のパタから来たという説が多いが、同じく古代朝鮮語の「多い」という意味の幡から来たという説もある[21]。この渡来氏族がまず落ち着いたのが、福岡県東部から大分県北部にわたる豊前地方と見られている。この地方の大宝2年(702)の三つの里(50戸からなる律令制の行政単位)の戸籍が残っている。それによると、旧上毛郡(福岡県の豊前市など)の2つの里と仲津郡(現中津市付近)の一つの里で、秦氏系の姓が全体の実に74ないし96%に達するという。

(注9) 『大祓詞』では、瀬織津比咩が川から海に流した諸々の罪を、速開都比咩、氣吹戸主、速佐須良比咩がそれぞれ役目を分担して処理してしまうということになっており、これらの神々を祓戸四神と称する。

(注10) 「比咩神社」は他に福井県に1社と長崎県に2社あるが、現在は比咩神を祭っていない。

(注11) 後に藤原氏となった中臣氏は、古代からきわめて重要な氏族でありながら、その出自が今ひとつはつきりしない。中臣氏の中興の祖藤原鎌足が常陸から出たとされるので中臣氏が関東常陸の出自と考える人も多いが、『和名抄』が豊前国仲津郡に中臣郷を載せていることなどから、太田亮は『姓氏家系大辞典』[22]において、中臣氏の発祥地がこのあたりであり、中臣は「仲津臣」のことであると断定している。大分県中津市の中心部に、中殿という地名がある。ナカドンは中臣の訛とされている。吉田東伍[23]によると、この貴船神社は、上記の天種子命を祭っていたという(現在の祭神はない)。『姓氏家系歴史伝説大事典』[24]も、多くの例を挙げて中臣氏が豊前国中津郡の出であることを説いている。587年の「蘇我・物部戦争」に先立ち、中臣家の氏長中臣勝海連は物部守屋とともに廃仏棄釈を主張し、蘇我馬子の配下に殺されている。大和の中臣本宗家は、物部本宗家と同じく、このあと大和から関東の物部勢力圏に逃れたと思われる[7]。

中臣(藤原)氏の氏神は奈良の春日大社であるが、春日四神がここに祭られたのはそれほど古くはない。社伝等によれば、和銅2年(709)、藤原不比等が茨城県鹿島神宮から武甕槌命(以下タケミカヅチ)を勧請したのが創祠で、神護景雲二年(768)に社殿を造営した際千葉県香取神社の經津主命(以下フツヌシ)と中臣氏祖神である天兒屋根命(以下コヤネ)を比売神とともに大阪府枚岡神社から勧請して合祀したとされる。

(注12) 前出の『日本書紀』神武前紀に、「菟狹(宇佐)國 造の祖有り。号けて菟狹津彦・菟狹津媛といふ。」(中略)このときに、勅をもて、菟狹津媛を以て、侍臣天種子命に賜妻せたまふ。天種子命

は、是中臣氏の遠祖なり。」と具体的な地名・人名(神名)を挙げて記されている。天種子命は、枚岡神社の主祭神コヤネの孫に当たる。これも中臣氏と豊前との縁を示す記述である。中臣氏は宇佐の女神「比咩」をよく知っていた、あるいは祭っていたのではないか。「中臣祓」とも呼ばれる『大祓詞』で、比咩神が主役になる理由が分かる。

- (注13) 『日本書紀』などによれば、任那には「日本府」があった。任那は加耶諸国^{あらかや}の一つ阿羅加耶(安羅國・阿那^{あらかや}などとも書かれる)とされる。これは釜山の西約 60km の現在の咸安(ハマン)市付近にあった国で、3世紀から6世紀まで存続した。ここからは多くの渡来人が来日している。
- (注14) 日本固有の女性または女神の名には「メ」が一般的である。『日本書紀』で「メ」で終わる女神名には、ミズハノメ、ナキサワノメ、イワツツノメ、ヨモツシコメ、ヨモコヒサメ、アマノウズメ、イシコリドメ、アマノサグメなどが挙げられる。これらはいずれも土着の古い神あるいは古来の日本語で表現された神名と考えられる。ミズハノメは現在多くの神社の祭神に残る水神である。古語辞典によると、「ヒメ」は男性(男神)の「ヒコ」と同じく、この「メ」に「立派な」という意味の尊称「ヒ」が附いたものである。「ヒコ」は古い渡来系の神に多く附いており、「ヒメ」の成立はそれ以降と考えられる。
- (注15) 『日本書紀』には、「比売」も少なく、崇神紀に一例のみである。垂仁記には渡来の女神比売語曾^{ひめこそ}が現れる。これが「比売」の表記が普及するきっかけになったものか。「媛」は神代紀には 4 例に過ぎないが、神武即位前紀以降にはかなり多く現れる。
- (注16) 『日本書紀』持統紀六年(692)2 月 11 日に持統天皇が 3 月 3 日の伊勢行幸を宣言し盛大な準備をするが、中納言の三輪朝臣高市麻呂がこれに対して農繁期のため止めるよう職を賭して繰り返し諫言する。しかし持統は 3 月 6 日これを強行して同 20 日帰京する。この行幸の意味は謎である。3 月 3 日は今の暦で 3 月 28 日に当たり、まだ農繁期とは思われない。三輪朝臣は大和王権の崇める大神神社を祭る氏族であり、前報[9]で述べたようにかつて王権の祭祀を司っていた。この挿話には宗教的な理由が隠されていると思われる。
- 伊勢神宮の神天照大神の荒魂を瀬織津姫と記す古文献も多い。あるいは『日本書紀』の内容がほぼ固まつたと考えられるこの時期、伊勢神宮の祭神名の変更が行われたという推測もできる。続報でさらに考察予定である。
- (注17) 三女神を祭る神社では滝津姫も多伎津姫も湍津姫の位置に入るので、湍津姫の別表記として間違いないと思われる[7]。
- (注18) 「たぎつ」は古語「たぎち(激ち)」の連体形で、滝・滾ると同根。
- (注19) 山口県で宗像神の分布密度が 異常に高いのは、明治末期の大合祀の影響を強く受けたためもある。既報[7]のように、『平成データ』の各県の全社数の明治 33 年調査に対する減少率は、山口県が 71%と福岡県の 59%よりも高い。ただし旧郡毎のデータはないので、この図では修正は行っていない。

- (注20) ここに挙げた神々の多くは既報[8]で紹介しているが、そこで触れなかった主な神々について説明する。
オオヤマツミ(『日本書紀』に大山祇)は神話では皇室の祖先瓊瓊杵尊の岳父となっているので日本古来の神のように見えるが、伊予国風土記逸文[20]に總本社の愛媛県今治市大三島の大山祇神社の神が「わたしの「和多志大神」と紹介され、仁徳天皇の時代に百濟から渡ってきたとする。比較的新しい渡来神である。ミの附く神はワダツミ(古代朝鮮語のパタ=海の神から)などのように渡来系の神と考えられる。比咩(ヒミ)・オカミも同じと考えられる。
- オオヤマクイ(大山作)は滋賀県の比叡山(日枝山)の神で、京都の松尾大社の祭神でもある。祭る神社には日吉神社(これも本来はヒエと読む)の名が多い。松尾大社にはイチキシマが相殿として祭られており、宗像との関係が見える。
- 諏訪神とは長野県諏訪市の諏訪大社の主祭神建御名方神で、記紀では出雲系の神となっている。
- (注21) 宗像市でも釣川中流の河床から広形銅矛片が出土しているが、これは埋納物ではない[31]。
- (注22) この図は埋納以外の出土例も含む。また原図には弥生後期と題されているが、現在の年代認識[32]では中広銅矛・平形銅劍・出雲型銅劍は中期後半が中心とされるので、弥生時代後半とした。
- (注23) 塙安神は、神代紀第五段第六の一書に伊弉諾 尊と伊弉冊 尊が国土と共に生んだ諸神の一つの土の神として出る。一方塙山神は同段の第二・第三・第四の一書に伊弉冊尊が難産で死ぬときに生まれた神と書かれ、前2者は単に土の神と説明するが、第四の一書にはこのときの大便が化した神とする。ところが『古事記』は、第四の一書の説の塙山神を波邇夜須毘売神としている。
- (注24) この地域はまた厳島信仰の強い地域であり、イチキシマ単神を祭る神社の多くは厳島系である。厳島神社は安芸の宮島の本社が近世に三女神化したので、その影響を受け三女神化している神社も多い。
- (注25) 明治神祇制度の整備に当たって官令で各地の神社の明細を提出させたものである。現在は一般には公開されていないが、高知県ではそのコピーが県立図書館で閲覧可能である。
- (注26) なおこの鏡は、「三角縁神獸鏡卑弥呼の鏡説」を鼓吹した小林行雄氏が「鏡信仰畿内発生説」のよりどころとした[39]。当時は出土が四面しかなく、そのうち二面が近畿の鏡で、北部九州ではまだ宇木汲田の一面のみであった。このことから同氏は北部九州では鏡信仰は根付かなかったと考え、近畿地方で今後この鏡の出土が増えるだろうとの希望的観測をしたが、その後の出土は全く逆で、増加したのは長野の一例を除けばすべて北部九州であった。
- (注27) かつての考古学の大御所が卑弥呼の受領した鏡を三角縁神獸鏡と主張した[39]ために、現在でもこれに固執する研究者が存在しマスコミにもその信奉者が多い。しかしその後の日中考古学の進展によりその主張は成り立たなくなっている。日本での三角縁神獸鏡の出土は卑弥呼の受領した 100 枚を遙かに超え、『鏡データ集成』と『補遺1』とを合わせ 457 面に達しうち 384 面が「舶載」とされている。2011 年には 530 枚を越えているという[48]。しかも『鏡データ集成』と『補遺1』では全て古墳時代の出土である。なによりも、中国本土での発見は、信頼できる発掘によるものでは、1 枚もない。これで数 100 枚が中国からもたらされ

たという主張は、考古学の自己否定であろう。また科学的な分析でも、三角縁神獸鏡が中国製との主張は成り立たない[49]。

- (注28) 阿蘇山西麓の肥後・白川・菊池川流域および東麓の豊後・大野川上中流域は、鉄器を出土する集落が弥生時代で最も密集する地域である。しかも、一遺跡あたりの出土点数が多く、鍛冶の際に生じた鉄片類を除いても 2000 点に及ぶ鉄製品が出土する例がある[53]。そして鍛冶遺構は弥生時代後期中葉から終末期にかけての集落址で数多く調査され、その分布密度は日本列島で最も濃いという。そのような遺跡の一つ狩尾遺跡群の調査を担当した熊本県教育委員会 [55]は、「鉄製品の出土状況はほとんど使い捨てであり、破損品を補修あるいは回収して再利用されていない」「これは生産地ならではの鉄製品の消費状況であるが、仮に舶載品である鉄素材にすれば、あまりにも浪費的な消費にすぎ、また陸揚げ地点からもかなりの遠隔の山間地で地金を鉄製品に加工する必然性は乏しい。こうした困難は、ただひとつ地金が舶載品でなく在地で作られたと考えれば説明できる」とする。狩尾遺跡群のすぐ近くに現在も稼働する褐鉄鉱(リモナイト)の明神山鉱山(戦前まで製鉄原料に使用)がある。「阿蘇谷湖」であった時期が長かった阿蘇盆地には、芦のたぐいの植物が作った沼鉄鉱[56]の鉱床が全体に拡がっている。これから水分を追い出した褐鉄鉱は高品位のベンガラの原料となり、容易に鉄に還元できる[57]。弥生時代の製鉄の可能性については、別稿で論じたい。
- (注29) ヤマトでは宇陀の水銀(辰砂)の大鉱床が弥生時代終り頃開発され、まもなく大和盆地勢力の支配下に置かれたと思われる(別報で詳述予定)。有力者埋葬時の屍体施朱は西日本では既報[8]の山鹿貝塚で始めて見られ、以降全国に拡がる[64]。「倭人伝」に「山には丹あり」と書かれ、魏帝への上献品にも丹があつたように、火山国の中日本では各所で辰砂が産出する[65]。北部九州でも各地に「ニ」や「アカ」の地名にゅうつひめが見られるが、なかでも佐賀県嬉野市には 7 社もの丹生神社(現在はタンジョウと読まれるが、丹生津姫を祭る社も残っているので本来はニユウ)があり、有力な辰砂の産地であったと見られる。しかし一般に河床に溜まった辰砂の採取に過ぎなかつたため資源はすぐに枯渇し、常に新鉱床の探索が必要であった。大分県にも地名・社名などから多くの古代産地が推定され、卑弥呼の勢力基盤の一つではなかつたかと思われる。本報で見たような弥生文化の中央構造線に沿つた東方への進出の動機の中には、辰砂資源の探索もあつたと思われる。
- 最近南武志らが辰砂に含まれるイオウの同位体比分析による産地推定法を確立した[66]。その結果によると、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて北部九州と山陰で中国産の朱が使われるようになるが、ヤマトの初期古墳(前記ホケノ山古墳を含む)から宇陀の丹生鉱山など関西系の朱が大量に使われはじめ、それが全国に波及するという。
- (注30) 『後漢書』にはこの乱が「桓・靈(後漢の桓帝と靈帝)の間」すなわち 147-188 年と書かれているので、共立されたのは 2 世紀の終わり頃であろう。

【参考文献】

- [1] 宗像大社復興期成会, 『宗像大社昭和造営誌』, 1976.
- [2] 宗像大社復興期成会, 『沖ノ島』, 宗像大社復興期成会, 1958.
- [3] 宗像大社復興期成会, 『続沖ノ島』, 宗像大社復興期成会, 1961.

- [4] 宗像大社復興期成会, 『宗像沖ノ島1 本文』, 宗像大社復興期成会, 1979.
- [5] 坂本太郎他校注, 『日本書紀』 (一) ~ (五), 岩波書店, 1994-2005.
- [6] たとえば、大和岩雄, 『神社と古代王権祭祀』, 白水社, 1989, p. 220.
- [7] 矢田 浩, 『宗像神を祭る神社の全国分布とその解析—宗像神信仰の研究 (1) —』, むなかた電子博物館紀要第7号, 2016.
- [8] 矢田 浩, 『北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析—宗像神信仰の研究 (2) —』, むなかた電子博物館紀要第8号増刊, 2017
- [9] 矢田 浩, 『宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり (上) —宗像神信仰の研究 (3) —』, むなかた電子博物館紀要第8号増刊, 2017.
- [10] 神社本庁, 『全国神社祭祀祭礼総合調査 (平成七年)』, 2005.
- [11] 石原道博, 『新訂魏志倭人伝・ほか三編』, 岩波書店, 2006.
- [12] 今鷹真ほか訳, 『正史三国志4』, 筑摩学芸文庫, 2009.
- [13] 岡田莊司, 『神社史料集成 (神社史料データベース)』
<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/jinjaindex.html/>.
- [14] 宗像神社復興期成会, 『宗像神社史 下巻』, 吉川弘文館, 1987 復刊.
- [15] 佐竹昭広ほか, 『新日本古典文学全集12 続日本紀』, 岩波書店, 1989.
- [16] 中野幡能, 『八幡信仰事典』, 戎光祥出版, 2002.
- [17] 中野幡能, 『八幡信仰史の研究 (増補版)』, 吉川弘文館, 1975.
- [18] 鎌田純一, 『先代舊事本紀の研究 校本の部』, 吉川弘文館, 2013.
- [19] 田村圓澄ほか, 『宇佐八幡と古代神鏡の謎』, 戎光祥出版, 2004.
- [20] 秋本吉郎校注, 『日本古典文学大系2 風土記』, 岩波書店, 1958.
- [21] 大和岩雄, 『秦氏の研究』, 大和書房, 1993.
- [22] 太田亮, 『姓氏家系大辞典』, 角川書店, 1963.
- [23] 吉田東伍, 『大日本地名辞書増補版第4巻』, 富山房, 1980.
- [24] 志村有弘編, 『姓氏家系歴史伝説大事典』, 勉誠出版, 2003.
- [25] 源城政好, 『日本の神々 第五巻』, 白水社, pp. 94-99, 1986.
- [26] 志賀剛, 『神名の語源辞典』, 思文閣, 1989.
- [27] 白川静, 『字通』, 平凡社, 1996.
- [28] 金思燁, 『記紀万葉の朝鮮語』, 明石書房, 1998.
- [29] 津屋崎町, 『津屋崎町史資料編上』, p. 412, 1996.
- [30] 武末純一, 『古文化談叢 第7号』, pp. 121-147, 1982.
- [31] 武末純一, 『沖ノ島祭祀の成立前史』・『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告①-1, 2011.
- [32] 北島大輔, 『古墳時代への胎動 (弥生時代の考古学5)』, pp. 121-138, 2011.
- [33] 井上洋一ほか「東アジアの中の日本青銅器」樋上洋一他編 『考古資料大観 6 青銅・ガラス製品』, 小学館, p. 43, 2003.
- [34] 福永伸哉, 『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』(平成18-21年科研費研究報告書), pp. 55-70, 2010.
- [35] 朴天秀, 『加耶と倭』, 講談社, 2007.
- [36] 正林護, 『日本の古代遺跡42 長崎』, 保育社, 1989.
- [37] 岡本健児, 『日本の古代遺跡39 高知』, 保育社, 1989.
- [38] 野内智一郎ほか, 『神道と日本文化の国学の研究発信の拠点形成研究報告1』, 2007.
- [39] 小林行雄, 『古鏡』, 学生社, 1965.
- [40] 国立歴史民俗博物館, 『共同研究「日本出土鏡データ集成」2／—弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』, 国立歴史民俗博物館研究報告第56集, 1994.
- [41] 白石太一郎・設楽博己, 『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 補遺1』, 国立歴史民俗博物館研究報告第97集, 2002.
- [42] 高倉洋彰, 『金印国家群の時代』, 青木書店, 1995.
- [43] 福岡県教育委員会, 『汐井掛遺跡』, 1979ほか.
- [44] 宗像市, 『宗像市史 通史編1』, 1997.
- [45] 綿貫俊一, 『大分県歴史博物館紀要14』, pp. 43-49.
- [46] 安心院町教育委員会, 『安心院・宮の原遺跡』, 1984.
- [47] 徐萃芳, 『三角縁神獸鏡 (王仲殊著)』, 学生社, pp. 311-322, 1992.
- [48] 菅谷文則, 『古代の鏡と東アジア』, 学生社, pp. 35-64, 2011.
- [49] 新井宏, 文献48, pp. 89-129, 2011.
- [50] 日田市, 『日田市史』, pp. 49-51, 1990.
- [51] 串間市, 『串間市史』, pp. 45-50, 1996.
- [52] 山鹿市教育委員会, 『方保田東原遺跡(8)』, 2007など.

- [53] 村上恭通, 『古代国家成立過程と鉄器生産』, 青木書店, 2007.
- [54] 熊本県教育委員会, 『小野寺遺跡』, 2010 など.
- [55] 熊本県教育委員会, 『狩尾遺跡群』, 1993.
- [56] 矢田浩, 『鉄理論—地球と生命の奇跡』, 講談社, 2005.
- [57] 山内祐子, 『古文化談叢第70集』, 2013.
- [58] 関川尚功, 『季刊邪馬台国』, 130号, 2016.
- [59] 奈良県立橿原考古学研究所, 『纏向 : 奈良県桜井市纏向遺跡の調査』, 1976.
- [60] 奥山誠義, 奈良県立橿原考古学研究所編『ホケノ山古墳の研究』, pp. 191-192, 2008.
- [61] 今鷹真ほか訳, 『三国志I』, 筑摩書房, p. 78, 1977.
- [62] 松尾則男, 『おおいたの古墳と神社』, 東九企画, pp. 395-408, 2004.
- [63] 唐津市教育委員会, 『久里双水古墳』, 2009.
- [64] 市毛薰, 『朱の考古学』, 雄山閣, 1975. 1998.
- [65] 松田寿男, 『古代の朱』, ちくま学芸文庫, 2005.
- [66] 南武志ほか, 『考古学と自然科学』, 第62号, pp. 65-71. 2011 など多数.
- [67] 柳田康雄, 前原市教育委員会『平原遺跡』, pp. 115-120, 2000.
- [68] 謝銘仁, 『邪馬台国 中国人はこう読む』, 立風書房, 1963.
- [69] 関和彦, 『卑弥呼』, 三省堂, 1997.
- [70] 荊木美行, 『風土記と古代史料の研究』, 国書刊行会, pp. 199-289, 2012.
- [71] 遠澤謙, 『魏志倭人伝の航海術と邪馬台国』, 成山堂, 2003.
- [72] 森博達, 『日本の古代1倭人の登場』, 中央公論社, pp. 157-188, 1985.
- [73] 西谷正, 『魏志倭人伝の考古学』, 学生社, 2009.
- [74] 谷川健一, 『白鳥伝説』, 集英社, 1986.
- [75] 小沢佳憲, 『古文化談叢44集』, pp. 1-33, 2000.
- [76] 久住猛雄, 『福岡平野 比恵・那珂遺跡群』『集落からよむ弥生社会 [弥生時代の考古学8]』, 同成社, pp. 240-263, 2008.
- [77] 武末純一, 『行橋市史 資料編 原始・古代』, pp. 319-343, 2006.

【補注】

本稿最終校正の段階で、国立歴史民俗博物館の『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』の増補改訂版に当たる集成が出版されている（下垣仁志, 『日本列島出土鏡集成』, 同成社, 2016）ことに気が付いた。かなりの鏡の追加があるが、全体の傾向を大きく変えるものではないので、本稿では国立歴史民俗博物館の修正による解析をそのまま載せている。ただし図16では最新のデータを用いている。

[付編] 魏使の邪馬台国への行程

1. 「魏志倭人伝」についての基礎的認識

最近の信頼できる研究によると、魏志倭人伝の記述は検証できる範囲ではかなり正確で信頼できることがわかってきてている。たとえば倭の風俗、政治と外交が述べられているくだりには、ほとんどの人が信頼を置いている。問題は邪馬台国連合(倭)を率いていた女王卑弥呼の「都する」邪馬台国の所在である。

この問題を考える前に、あらかじめ心すべき基本的事項を挙げておこう。

- ① 『三国志』という書物は、中国の王朝の正史であって、王朝の記録である。したがって他国のことと記すのにも、王朝が接触したことだけが書かれている。他にどんなに大きな国があるが、接触していない地域については触れていない。これは世界地理書ではないのである。中国は自国が世界の中心と信じていたから、接触を求めてくる国以外は蛮族と見なして興味を示していない。だから仮に日本列島に倭国(邪馬台国連合)以外に大きな勢力があったとしても、『三国志』の著者はもちろん知らないし、知ろうともしていない。これは、「女王國の東に海を度ること千余里、また國あり、皆倭種なり」という一節からも分かる。倭人の國でも、朝貢してきた邪馬台国以外には関心を払わないである。
考古学者とマスコミに多い「邪馬台国畿内説」信者は、多くこのことを誤解している。邪馬台国問題は、決して考古学だけで決められるものではない(文字資料が出ない限り)。考古資料から推定される当時日本の最大の勢力が、邪馬台国ということではない。仮に有力な「国」があつても、魏使が通らなければ記述されていないのである。
- ② これに関連して、当時は誰も正確な地図を持っていなかったことを忘れてはならない。旅行の行程を地図の上で線を引いたりして考えている人が多いが、近代以前の中国人が他国、特に日本列島について非常にいい加減な地理的認識しかなかったことは、1000 年以上もあとでできた地図を見てもわかる。これらは魏志倭人伝などの記述に基づいているものが多いと思われる。ところがそれをもとに、畿内説論者が中国人の東に広がる日本列島を南に広がると昔から信じていた根拠に挙げるのは本末転倒である。
- ③ 特に「魏志倭人伝」に関しては、著者が魏使の記録以外に倭国についての地理的情報を持ち合わせていなかったことを注意しなければならない。この条の地理的叙述は、ほとんどすべてが魏使の旅行記録に基づくものである。したがって、当時の自然・人文地理と、当時の旅行事情を考慮しなければならない。現在の地図上の方角や距離などをもとに考えてはならないのである。水行には当時の航海技術を考えなければならないし、陸行でも多くの荷物を持った正使一行であることを忘れてはならない。

④ 考古学者は一般に、もっとも顕著な出土品が出たところをその地方の中心地と考え、魏使がかならずそこを通った（または滞在した）と思いこんで議論しているが、これは必ずしも正しいとは言えない。一般に正使は最終目的地にできるだけ早く到着するような行程をとるはずで、途中の国の中心地を歴訪する必要は全くない。行程の都合で、各国の中心地から離れた（ある場合は仮の）迎賓館のような建物で休憩することがあると思われる。江戸時代の朝鮮通信使は、筑前国内では原則として玄界灘に浮かぶ相島だけに立ち寄り、そこの仮ごしらえの館で饗応を受けている。

⑤ 『三国志』は、当時の中国人が自国語で書いた書物であり、中途半端な漢文知識しかない日本人が素人解釈すると誤ることが多い。当時の中国語について十分な知識を持つ人、できれば中国人の読み解きに基づいて考えるべきである。

たとえば、後に述べるように、倭国に上陸してからの魏国の使いの行程には一見謎が多い。そこで、この行程を順次たどったのではなくて、倭国のある地点、たとえば伊都国からそれ以降に書かれた国にそれぞれどのくらいかかるかを述べたものではないかとする論者がかなりいる。これは「放射説」と呼ばれる。これに対して、中国人文献学者の謝銘仁は、中国文ではこのような読み方はあり得ないとする[68]。信頼できる国内の多くの文献学者も、同意見である[69][70]。

放射説の決定的な問題点は、邪馬台国連合の 29 国のうちなぜ 8 国だけを記述し、他の 21 国は名前を挙げるに止めたかの説明がつかないことである。8 国のすべてが大国というわけでもないし、他の 21 国もすべて小国というわけでもないであろう。たとえば、かなり大きい国であった吉野ヶ里らしい国は全く出てこないのである。魏使が実際に見聞した 8 国についてのみ記述した、と考えるほかには説明がつかないのである。

このことはまた、邪馬台国に至る道程で、途中の 7 国を連続して通ったこと、すなわちこの 8 力国は「国境」を接している、ということを意味する。小国の大岐・対馬でも通った国は詳細に記述しているが、通らなかった国については全く記述がない。大国であっても記述がないこともありますのである。大きな遺跡が発見されたからといって、それを魏志倭人伝に記述のあるいはれかの国に当てはめようとする人が多いが、それは往々にして大きな思い違いにつながる。

また、いわゆる「邪馬台国畿内論者」は、表 3 の⑧⑨の方角、すなわち末盧国から伊都国へ向かう方角と伊都国から奴国へ向かう方角の南東が、北東の誤記または誤写とし、これ以降方角が実際と 90 度誤っているとする。しかしこのような恣意的で部分的な歪曲は、多くの文献学者が強く否定しているところである[69][70]。

表3 帯方郡から邪馬台国に至る行程とその里程(魏志倭人伝による)

魏の使者の行程	里程	推定距離(km)	1里の長さ(m)
①帶方郡→狗邪韓國	あるいは南あるいは東へ七千余里(海岸によって水行)	563	80.4
②狗邪韓國→對馬國(対馬)	千余里(海を渡る)	71	71
③對馬國→一大國(壹岐)	千余里(南海を渡る)	73	73
④一大國→末盧(マツロ)國	千余里(海を渡る)	56	56
水行(韓國)と渡海の全行程	一万余里	763	(平均)76.3
⑤末盧國→伊都(イト)國	東南陸行五百里(草木茂盛、行くに前人を見ず)	43	86
⑥伊都國→奴(ナ)國	東南百里	11.5	115
⑦奴國→不彌(フミ)國	東行百里	11.5	115
全体の合計里程	一万七百里	829	(平均)77.5
⑧不彌國→投馬(トウマまたはツマ)國	(南水行二十日)	100~140 [1300 ~1800里]	—
⑨投馬國→邪馬台國	(南水行十日、陸行一月)		—
全行程の合計里程(その他諸国の紹介の後に記述)	万二千余里	(~930~970)	—

⑥ 旅行の季節によって方位の認識のずれがあるという議論がある。当時の中国は、世界でも先進的文明国であり、科学技術も発達していた。遠澤葆によれば[71]、すでに紀元前の文献に正確な方位の決定法が記されているという。派遣されてくる魏使は、当時の最高の知識人である官僚である。季節による日の出の方角の違いについて知識がない、ということはあり得ない。

ただし「草木茂盛し、行くに前人を見ず」と書かれた倭国の中陸部では、開発が進んで樹木が少なく見通しがきく中国と違って、行き先の方位が分かるはずがない。このような場合は出発時の方向を記載する他はなく、おそらくそうしたのではないかと推定される。

⑦ 魏志倭人伝に出てくる倭国地名を、現在または過去に記録されている地名に当てはめて所在地を推定する論者が多い。たとえば、邪馬台国をヤマタイと読んで、奈良の大和や、筑後の山門に宛てる議論が江戸時代以来多かった。しかし、当時の中国人がどのような発音を書き取ったかについて、専門的な検討が十分なされていない段階での議論が多い。

古代中国語の専門家によると、邪馬台はヤマダイと発音した可能性が高く、決してヤマタイやヤマトを聞き取ったものではないという[72]。これがもし日本のどこにでもあるヤマダのことすれば、候補地を特定することは難しい。

2. 邪馬台国の大体の位置

前節の基礎認識の上に立って、魏使の辿った行程を考えてみよう。魏国を使いが、朝鮮半島中西部にあった魏の出張行政機関である帶方郡を出発して邪馬台国に至る途中で、朝鮮半島の1国と倭の7カ国を通る。そのうち倭の6番目の不彌(フミ、以下多くの人が採用する読み方に従う)国までは、「里」を単位とした距離で書かれている。

表 3 の最初の欄には魏国の使者の行程が、次の欄にその里程が示されている。これを見るだけで、邪馬台国が大体どの範囲にあるかが大体分かる。

この中で、狗邪韓国、對馬国、一大国、伊都国にそれぞれ現在の韓国の金海市付近、対馬、壱岐、糸島市の三雲附近をそれぞれ当てることには、誰にも異存がないところである。末盧国は呼子または唐津付近などの説があるが、松浦半島にあることにはこれまた異存がないところであろう。そうすると、伊都国と三雲までの合計は一万五百余里となる。

一方、行程記事の最後に「郡(帶方郡)より女王国に至る万二千余里」という文がある。すると、残りは 1500 里 + α 程度となる。これがどのくらいの距離かというと、確実なところでは表 3 の②と③、すなわち韓国金海市付近と対馬との間、対馬と壱岐との間それぞれの距離「千余里」の約 1.5 倍である。里程の起点と到着点を、仮に当時の重要な遺跡のある位置と考え、対馬では三根湾付近、壱岐では原の辻付近とすると、この二つの距離は直線でそれぞれ約 61km と約 66km となる。ただし航海には両島の海岸に沿って多少迂回するから、潮流などで多少曲がった航路を取ることも考え、その 1.2 倍程度とすれば安全であろう。

そうすると邪馬台国は、糸島市の三雲附近から直線距離で最大

$$127 \times 1.2 \times (1.5/2) = 114 \text{ km}$$

以内にあることになる。これを地図上で示すと図 18 のようになる。真東では豊後高田市付近、真南では宇土半島あたりとなる。

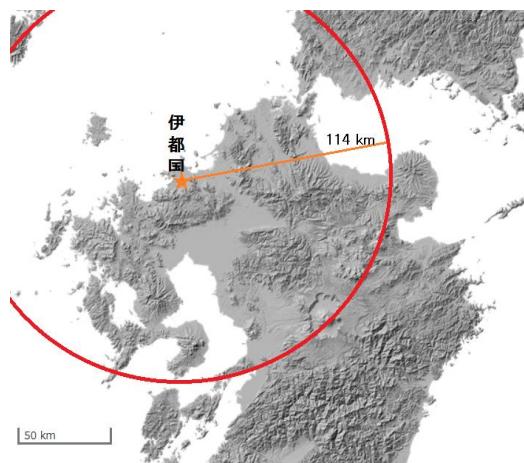


図 18 伊都国を中心とした邪馬台国の存在範囲

以下次節からさらに詳しく里程の検討をしよう。

3. 一里の長さ

以上のおおざっぱな検討でも分かるように、この「里」の長さは日本の里の長さとはまったく異なっている。ところが日本の里の観念につられて魏使の行程を誤解している人が多い。また当時中国で使われたと考えられている里(漢代で一里が約 450m とされる)の長さを無批判に採用する人も多い。

しかしそれでは、どの里程を見ても全く地理と合わない。あくまで原文の叙述をもとに「里」という単位を考えなければならない。すでに述べたように、幸い倭の 5 番目の奴国まではそのだいたいの所在についてほとんどの人の意見が一致している。そしてこの間の行程が里で示されている。このような明確な手

がかりがあるのに、里程がでたらめであるとする論者が多いのは不思議でならない。以下倭人伝の記述をもとに、この書での一里がどのくらいであったかを割り出してみよう。

まず①は、船で南に行き、それから東に行って狗邪韓国に着いたとするのが多くの人が一致する理解である。同じ魏志東夷伝中の韓(朝鮮半島南部全体を指している)の条に、「韓国は方四千里」と記しているのもこれをサポートする。中国の文献で「方」というとき、凹凸をまっすぐにして全体を正方形に修正して面積を表す習慣があるという[69]。現在の地図上で見ると約300km四方程度で、一里が100m以下であることが明らかである(以下図19参照)。



図19 魏志倭人伝による帶方郡から末盧国までの水行記述と韓国の大さ

その縦横四千里の正方形をまず南に四千里進み、次に東に三千里行って今の金海市あたりに中心のあつたと考えられる狗邪韓国に達するとすると合計約七千里となり、魏使の行程とよくつじつまが合っている。

現在の大韓民国の面積は約 98.000km^2 であるが、これは島嶼部をも含む。またこのころの三韓の領域は、現在の大韓民国よりやや小さいと考えられる。仮に古代三韓の面積が大韓民国の面積の80%とし、この面積を正方形で近似して四千里が何kmに相当するかを計算すると、ちょうど 280km になる。すなわち一里は 70m ということになる。もしこの里が、通常信じられているように 450m 程度であったとすると、三韓の面積は $1800 \times 1800\text{km}$ 、すなわち実際の大韓民国の面積の約 30 倍以上の $32.400.000\text{km}^2$ になってしまう。

ただし実際の朝鮮半島は南西の角が鋭角になった平行四辺形で近似されるので、正方形近似よりは航路は長くなる。航海の専門家である前記遠澤[71]によると、出発点はソウル西方の西海岸に突き出た泰安(テアン)半島の先端あたりと考えられるという。ここから半島の南西の角である海南角を経由して狗邪韓国(ゴヤハンゴク)の港と考えられる多大浦までの海路の合計は 304 マイル、すなわち 563km になるという。これが七千里に相当するので、一里は約 80m となる。

以上のように、韓国に関する東夷伝の記述からは、一致して一里が 70-80m 程度であると推定される。

この「里」は、東夷伝中の他の記述とも整合する。例えば、高句麗は「方二千里」と記述されている。高句麗は、朝鮮半島北部にあり当時は四周を他国に囲まれているとされている。もし 1 里が 450m とするとき、900km 四方となり、朝鮮半島を大きく飛び出してしまう。帶方郡は朝鮮半島内で支配している地域の地理はかなり正確に把握していたはずなので、このように中国に近い地域の数字は十分信頼してよいであろう。

なお上記の計算は、帶方郡がソウル付近にあったという説に基づいて行ったが、考古学的には、樂浪郡があつたことがほぼ確実な平壤付近の南約 70km の智塔里土城の方が有力という[73]。もしここから出発したとすると、行程はさらに 100km 以上伸び、1 里は 100m 近くになる。ただこれでは韓国の大さや、このあとの行程の記述とかなり食い違ってしまう。

それに、韓半島南部を支配するために樂浪郡の南に新しく創設した帶方郡が、そのように樂浪郡に接近して設けられるのは理解できない、というのが素人の率直な疑問である。あるいは、上記泰安半島のような、郡の境界にある港を起点に記述をしているのではないか、とも考えられる。ここでは出発地点についての考古学的結論はまだ得られていないと考えて、次に進むことにしよう。

4. 海を渡る千余里

次に海を度る(渡る)距離であるが、表 3 に示すように倭人伝には狗邪韓国(ゴヤハンゴク)から對馬国(対馬とされる)、對馬から一大国(一丈の写し違いで壹岐とされる)、壹岐から末盧国(=松浦:唐津付近とされる)の間はそれぞれ海を渡る千余里とされている。前出の遠澤氏によれば、古代の航法で表2の②③④の航海の最短距離は、それぞれ 32, 33, 25 マイル(海里)である。これはそれぞれ 59, 61, 47km である。ただしこれには出発点と到着地の仮定があり、またその両者の間の距離は含まれていない。たとえば對馬では北端の鰐浦港に到着し、出発はかなり南の小船越としている。「千余里」は魏志の記録に基づくものであるから、鰐浦港ではなくこの両港の間のどこかにあつた国を中心地に到着したときの距離を記したと考えるべきであろう。さらに実際の航海では海流・潮流や風向きの影響などで航行距離が多少長くなることをも含めて考慮し、上の数字の 20% 増と仮定すると表 3 に示した数字が得られる。③④についても同様に計算した値を記した。

以上の一里の推定値は互いに大差なく、平均すると約 76m となり、先ほどの韓国の面積から得られたものとほぼ一致する。殷の頃の古い単位に 1 里 70 数 m の短里というのがあつて、魏志が書かれた西晋時代にはこれが使われていたのではないかという見解があるが、実測から中国本土では長里が用いら

れていたらしいという反証もある。何らかの事情で、少なくとも東夷伝についてのみ短里が使われたのであろうか。いずれにせよ、東夷伝に関する限り、実際の地理との対比からはこれに近い値であることは間違いない。

5. 「陸行」の問題

これから陸行に移るが、ここで大きな疑問がある。それは、なぜ末盧国から伊都国へ行くのに海路をとらなかつたかということである。

唐津沖から糸島半島の加布里^{か ふり}湾あたりに向かう航路は海上の見通しもよく、海図を見ても当時の船の航海に危険な浅瀬も特に見あたらない。それなのになぜ「草木茂繁、行くに前人を見ず」というような難路を通らされたのか。実はここに、宗像の勢力も関与していた当時の政治情勢が潜んでいっているのではないかと思われる。

ここまで航海の方角については特に問題がなかつたが、「東南して伊都国に至る」という段で引っかかる人が多い。最近の発掘調査で、過去の記録にあった唐津市中心部の桜馬場遺跡を末盧国^{いとしま}の王墓とする考えが有力となってきた。このあたりが末盧国^{いとしま}の重要な拠点であることは間違いない。ただしより南の、後年郡衛^{ぐんが}(郡の役所)が置かれたと考えられている橋本地区の千々賀遺跡あたりを当時の伊都国^{いとしま}の中心と考える考古学者がいる[73]。しかし仮にそこに都があつたとしても、先ほどの前提で議論したように、伊都国に行くために大きく回り道してそのような不便な場所にわざわざ立ち寄つたということは考えにくい。

この桜馬場附近から伊都国^{いとしま}の中心があつたと考えられている糸島市三雲付近を地図上で見ると、真東からやや北に振っている(以下図 20 参照)。これを魏志の著者の方位認識のずれ、あるいは写し間違いとする人も多い。

しかし忘れていいのは、当時の人は今日の地図を持っていなかつたと言うことである。現在の感覚での、机上の議論は意味がない。実際、唐津から三雲の方角には雷山を主峰とする脊梁山脈が切れ目なく続いており、目的地は全く見えない。はつきりした地図がない時代には、目的地がどの方角にあるか分かりようがない。また、いったん山に入つたら、「行くに前人を見ず」という状態では方角のわかりようがない。したがつて前述の通り、方角の一連の記述は出発したときに向かつた方向以外には考えられない。

中国大陆では出発進行の方向がおおむね見通せるし、山地が少なく道路がほぼ直線的につづかれていることが多いので、中国の史書はこのような場合出発方向を目的地の方角として書いたはずである。「倭人伝」も、その習慣に従つて書いたものではないか。

唐津市付近から陸路をとれば、途中どのようなコースを取るにしても、著名な弥生時代の遺跡宇木^{うき}汲田付近を通る他はなく、確かに東南の方向に出発することになる。

陸路もいろいろ考えられるが、現在筑肥線が通る唐津湾の海岸沿いは断崖絶壁の箇所が多く、当時は通れる状態にはなかったというのが一般的認識である。従って、玉島川に沿って東行し、雷山の西方にある長野峠のあたりで背振山系を越えて糸島市に出る、現在の国道 323 号に沿うルートが一つの候補となる。山越えのルートはこのほかにいくつかあるが、いずれも距離に大差はないので仮にこのルートを採用することとする。

桜馬場あたりから糸島市三雲あたりまでは、直線距離で約 29km に過ぎない。しかし上記のルートの現在の自動車道路での距離は、53.6km もある。ただしこれは、町並みをバイパスで迂回したり、山道は勾配が緩くなるように回ったりするので、古代の歩行用道路の距離はこれよりかなり短いと思われる。そこでこの距離を自動車道路の 80%程度と仮定すると、表 3 の数字が得られる。これから得られる一里の長さも 86m で、これまでの水行の値と大きくは異なる。

6. 魏使は「奴国」のどこに立ち寄ったのか

しかしこれから先が難しい。もし奴国の中が、多くの人が仮定するように、「王墓」や豊富な遺物が出土する春日市須玖遺跡群のあたりにあったとすると、⑥は直線距離で約 19km、最短の日向峠を通ったとして現在の自動車道路で 25.8km となる。これはだいたい⑤の行程の半分程度と見なすことができよう。いくら里程の記述がおおざっぱであるとしても、⑥が⑤の 5 分の 1 という記述にはならないであろう。

こう考えると、魏使の休憩(おそらく宿泊)した地点(当時の奴国(の)政治的中心、あるいは使節の滞在施設)は春日市よりかなり西の、福岡平野の中心部のどこかにあったのではないかと思われる。墳墓などから見る須玖遺跡群の全盛時代は弥生中期末までであり、その後は金属工房などが立ち並ぶ手工業地帯としての色彩が強くなっているので、奴国(の)政治的中心を必ずしもここに考える必要はない。またすでに議論したように、正使をそこまで連れて行って滞在させる必要は、もちろんない。

なお福岡平野中央部は地図上では三雲のほぼ真東になるが、三雲を出発して古代の(現在も)メインルートと考えられる日向峠を超えようとすると、少し南寄りに出発しなければならない。昔の峠の入り口は今の自動車道路よりかなり南寄りであったといわれているので、やはり東南の方向に出発したことになる。峠は当然樹木が繁茂した状態であったであろうし、もちろん到着地点を見渡すことは全く不可能なので、この場合も出発した方向を記したと考えて不思議はない。

こう考えると魏志倭人伝に記す方角は十分理解できる。多くの「邪馬台国論者」は、奴国と不彌国に至る行程以降の方角を勝手に「間違い」としている。自説に都合のよいところだけ取って、自分の思い込みと合わないところを「間違い」としてしまうことは、少なくとも文献史学の立場から許されないことであろう。

7. 「南水行二十日」の意味

奴国と不彌国(の)所在をこれ以上詰める前に、⑦の水行の意味を考えておく必要がある。魏志の記述を見る限り、海を渡ることと水行とは分けて記述しているのは、多くの人が注意しているところである。水

行とは、河川を通行するか、倭人伝の冒頭にあるように、海岸に沿って航行する場合に使われるようである。

不彌国については、その音の類似から今の糟屋郡宇美町付近とするか、あるいは弥生中期に隆盛を誇ったとされる立岩遺跡群のある飯塚市のあたりのいずれかに比定する人がほとんどである。最近では弥生時代中期の武器形青銅器が多量に出土した宗像地方を挙げる人も多くなっている。いずれにしても南へは水行できないと考えて、多くの人が魏志の記述が混乱しているか、あるいは「南」を東の書き誤りとしてきた。

しかし実は、福岡平野から南に水行することが、少なくともその当時は可能であったと考えられるのである。

地質学的には、宝満山のある筑紫山地およびその支脈の大野城市の丘陵部分と、背振山地との間は大きな地溝(二日市低地帯)となっていて、太古は海だったと考えられている。福岡県の御笠川以西および佐賀・長崎両県は、福岡県の残りの部分ともとは別な島だったのである。これを埋めたのが、90.000 年前の阿蘇4火碎流である。その後東西両山地から流れ込む河川からの土砂の堆積によって、現在のような二日市低地帯ができた。この地峡帯の鞍部、すなわち福岡平野と筑紫平野との分水嶺の標高は、現在でもたかだか 40 m 程度しかない。二日市のあたりをボーリングすると、津波によって運ばれた有明海の泥の堆積層が見られるという。

この地峡帯は長い間湿地帯を形成していたらしく、歴史時代以前にはよい道路は造られていなかつたと思われる。一方両側の山地には、日本書紀の神功紀などに見るように、古墳時代以降になっても「まつろわぬ」ものどもが群居していた。8 世紀に成立した『肥前国風土記』に、鳥栖市のあたりを通る人が半分殺されるというような記述があるように[20]、山地の通行は危険を伴っていた。したがってこの地峡帯を北流する御笠川と南流する宝満川の「水行」は、福岡平野と筑紫平野を結ぶ、上古代のもっとも重要な交通路であったと考えられる。谷川健一も同様に考えている[74]。

ただし、必ずしも連続した水路の存在を仮定する必要もない。御笠川水系の高尾川上流の筑紫野市二日市南から上古賀二丁目のJT工場のあたりと、宝満川の流れている針摺二丁目までの距離は 1000 m ほどしかなく、その間は水田になっていて標高差はほとんどない。土砂の堆積が進んだ現在でもこのような状態なので、当時はその間の連絡はきわめて容易であったであろう。実際江戸時代にも筑後地方の年貢米を博多港から積み出す時にはこのあたりで積み替えを行ってこの水路が用いられたという。積み替えを省くために運河の掘削が何度か試みられ、実際に水路が開かれたこともあるという。

以上のことから、「南水行二十日」とは御笠川を遡上し、おそらく途中で船を乗り換えて宝満川を下ることとして、全く無理な点はない(図 20)。

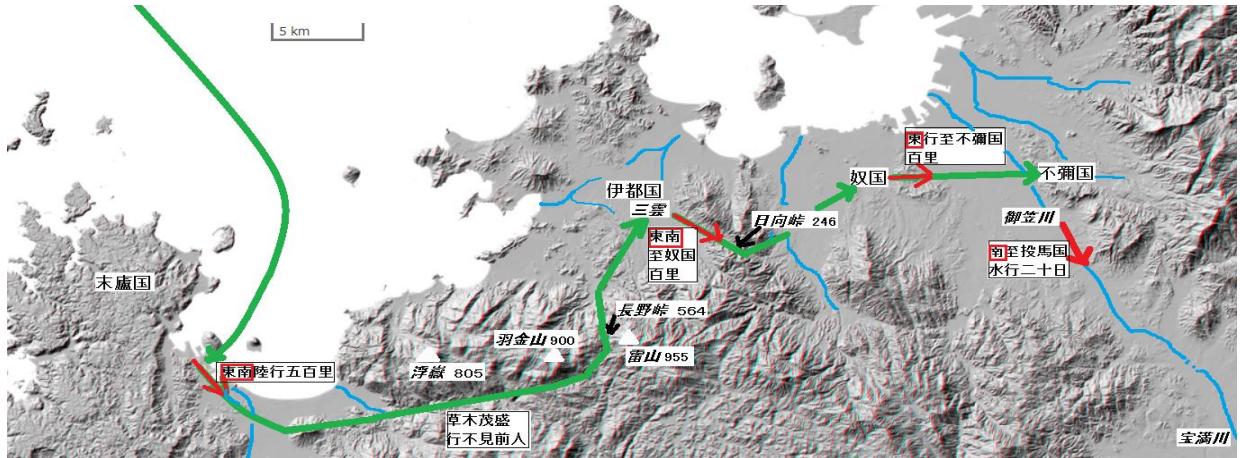


図 20 魏志倭人伝による末盧国から不彌国までの行程の推定(国土地理院地図使用)

8. 奴国と不彌国

以上の考察から、「南に水行」するときの出発点は、御笠川下流に沿った地点と推定される。御笠川東岸の月隈丘陵には、348基の甕棺墓が出土した弥生中期から後半の金隈遺跡がある。この丘陵の背後が宇美地方である。この墓域は、対岸にあった奴国の人たちのものではなく、宇美を後背地に持つ人たちのものではなかったのか。続く時代にも、宇美町とその周辺には古式の前方後円墳がいくつか築かれている。川が異なる政治勢力間の境界になることは例が多い。

その後も御笠川の東岸に弥生時代の遺跡が多く発見され、調査されている。福岡空港構内の雀居遺跡、空港に隣接する下月隈遺跡群などである。後者の一つ宝満尾遺跡では、弥生時代後期にもたらされたと思われる漢鏡や鉄斧などの舶来品が見つかっている。さらに最近、弥生時代後期の大型墳丘墓も見つかっている。このあたりに、このころの「国」があったとして全く問題はない。

ほとんどの埋蔵文化財の調査担当者や歴史研究家は、福岡市東部とその周辺の弥生時代の遺構や遺跡を、すべて短絡的に「奴国」に結びつけてしまう。しかし魏志の記述から見ると、弥生前半に隆盛を極めた奴国は、邪馬台国時代には政治的に邪馬台国や伊都国に下風に立っていたと考えられる。小沢佳憲によると[75]、奴国を中心と考えられてきた春日丘陵に弥生時代中期までに繁栄した集落の数が、中期末から後期初頭にかけて激減するという。中期に王墓の発見された須玖岡本でも、このとき集落が廃絶している。おそらくは御笠川や那珂川の水運の状況が変わったことによるのではないか。代替拠点としては、このころ繁栄する西新地区と並んで、まず志賀島などの博多湾東部の港が利用されたと考えられる。そうすると博多湾の東部を本拠地としていたと思われる志賀島の海人が、交易の担い手となるのは当然であろう(おそらくそれ以前からその役割を担っていたであろうが)。この海人族の本拠地は、現在の糟屋郡であったと考えられている。この糟屋郡が、当時の不彌国であったのではないか。不彌国の名も現在の糟屋郡宇美町に音が近い。そして海を連想させることは言うまでもない。

神社の分布も、これを支持する。宇美のある糟屋郡は、北部九州の海人族の重要な根拠地であった。御笠川の流域には、現在でも志賀系(ワタツミ系)の海神を祭る神社が多く分布している。上記の福岡空港のあるあたりのかつての席田郡では、全13社中4社が志賀系の海神を祭る。この分布は、志賀海神社のある志賀島から二日市あたりまで続く。さらに宝満川が流れ込む筑後川の河口付近一帯にも、志賀系の海神を祭る神社が非常に多い。このことは、博多湾から有明海に至るこの低地帯の水運を、不彌国に属する志賀系の海人族が一貫して管理していたことを推測させる。

御笠川と那珂川との間の河口付近の微高地には、ほぼ弥生時代を通じて、比恵・那珂遺跡群が営まれていた。これらの集落からは、権力者の存在を示す武器型青銅器や鏡はほとんど出土せず、水田跡も少ない。それにもかかわらず、大きな倉庫風の建物跡を含む計画的な町並みと幅の広い道路の跡などがあるので、交易通商都市であったのではないかと考えられている[76]。上述のように、この時期御笠川の水運を支配していたのはその東岸の不彌国の人たちであったと推定できるので、この大集落にも当時は不彌国の勢力が及んでいたのではないか。大きい道路が南北の大通りと直交して御笠川河岸に達していることも、御笠川の水運を意識した街であることを窺わせる。

御笠川中流の春日市にある須玖遺跡群の甕棺から豪華な副葬品が出土しているため、奴国の「王」が弥生時代を通じて現在の博多一帯を治めていたと考えられ、これまで疑う人はほとんどいなかった。しかしこの「王墓」は魏使が通ったときより約200年よりも前のものである。この王墓以降も須玖遺跡群で金属などの生産工房が引き続き盛んに営まれるが、次代の王墓は発見されていない。このころの春日市付近は、引き続き工業生産の中心ではあっても、奴国の政治的中心ではなかったのではないか。

そしてすでに議論したように、魏使を政治的中心や生産工房のあるところにまで、連れて行く必要は全くない。行程上便利なところに宿泊(または休憩)させればよいのである。日向峠を越えればもう「二万余戸」とされる大きな奴国の中に入っているのであるから、どこか宿泊または休憩した場所を「奴国に至る」と表現するのは当然である。

こう考えると、表3の⑥・⑦は無理なく理解できる。伊都国から御笠川河岸までが約二百里で、奴国での魏使の滞在地はそのほぼ中間にあったと解釈できる。この間の距離は、日向峠経由で現在の道路では28.9kmである。⑤と同様に考えてその80%とすると約23kmになる(ちなみに直線距離は22.3kmである)。奴国での宿泊地がこの距離のちょうど中間にあったとすると、一里は115mになる。これはこれまでの航海などから割り出した短里の76mよりはかなり長いが、その1.5倍以内なので許される近似といえよう。

伊都国からこの中間点までは室見川の渡河があり、中間点から御笠川河畔に出るには那珂川を渡らなければならないことを考えると、百里はたぶん魏使の一日の行程であり、記述を簡潔にするため、きりのよい数字にしたのではないか。

以上の経路を考えると、帶方郡を出発して不彌国に至る行程の合計は829kmであり、倭人伝の記す里程の合計一万七〇〇里で割ると、一里は77.5mとなる。この値は帶方郡を出発して以降一貫して大きく変わることはなく、互いに矛盾するところは全くない。

9. 邪馬台国は九州東岸にあった

さて御笠川を南に水行して着く投馬国(ツマと読む人が多い)とはどこか。ここから行程の表現が日単位になるので、推定が難しくなる。この疑問については、これまで納得の行く説明は見あたらないようである。もし現代の感覚で南に 20 日 + 10 日も水行するとそれこそ沖縄の方まで行ってしまう。それでは邪馬台国的位置に関する魏志倭人伝中の他の記述と矛盾する。ではまずその言うことに耳を傾けてみよう。

(イ)先に述べたように、行程記事の最後に「郡(帶方郡)より女王国に至る万二千余里」という文がある。女王国とは、他の記述から卑弥呼のいる邪馬台国を指すと考えるのが自然な解釈であり、中国人の文献史学者もそう読んでいる[68]。ところが、日本では卑弥呼は女王国の王であって、邪馬台国の王ではなかったという詭弁を考えた人がいて、「畿内説」に有利であるというのでこれを信じている人も多いようである。しかしそれではなぜこのような長い旅程ではるばる邪馬台国に行かねばならなかつたのかが、説明できないであろう。

自然に解釈すれば、前述のように伊都国までの距離合計一万五百里を差し引いて、邪馬台国は伊都国から千五百余里、すなわち以上で推定した一里の長さでは約 $116\text{km} + \alpha$ 程度の距離にあることになり、九州島内を出ることはない。

(ロ)表1の8国以外の邪馬台国連合に属する21カ国については、名前だけを列举していて、そのあとで「その南に狗奴(クナと読む人が多い)国ありて、男子を王となし、その官に狗古智卑狗あり、女王に属さず。」と述べている。この狗奴国は後に単独で邪馬台国連合と争い、卑弥呼が魏に救いを求めるほどの強国である。官の名はクコチヒクと読めるが、魏志の他の用字例から見てキクチヒコ、すなわち菊池彦を表したと考えるのが自然であろう。そして菊池川流域および南に接する白川流域、これをさかのぼった阿蘇盆地は、この当時日本最大の鉄器とベンガラの生産地帯であり、ほぼ現在の熊本県に当たるこの地域が弥生時代後半急速に富と勢力を増してきたことが窺える(本文7.1節参照)。邪馬台国に対抗できる強国狗奴国と考えてよいであろう。

そうすると邪馬台国は熊本県以南ではあり得ない。

(ハ)周辺の土地との位置を示す箇所には、「^{わた}女王國の東に海を度ること千余里、また國あり、皆倭種なり」とある。東に 80km ほどの海を渡ると、同じ倭人の住んでいる国々がある、というのである。末盧国以降この記述まで海を渡るという表現はないから、邪馬台国は九州島内に考える他はなく、しかも九州島内で海を隔てて東側に別な大きな陸地(四国)がある(あるいは意識の中にある)土地を考えざるを得ない。具体的に言えば、大分県または宮崎県ということになる。福岡県の東部では、海を渡った陸地は北の山口県になってしまふ。

10. 投馬国とはどこか

上の考察から表3の⑧と⑨の水行は途中で東か西に曲がらざるを得ないが、上記(ハ)からは東に向かつたとしか考えられない。しかし方角の誤りとする必要はない。

魏使の乗った船は宝満川を下り筑後川に合流するが、筑後川は古来有名な暴れ川であって、大規模な治水事業が行われる前は現在よりも著しく屈曲して流れていた。これは現在の川の流れと一致していない佐賀県と福岡県の屈曲した県境を見てもわかる。同じ平野内を流れる宝満川についても同様であったであろう。このようなところを水行する場合、川岸には木が茂っていたであろうから、先ほどの陸行と同様、全体としてどちらの方角に進んでいるかはやはり分かりにくかったであろう。従ってこの「南水行」とは、やはり出発時点での方角と考えてよいのではないか。

そう考えると、⑨の出発点の投馬国は、南流する宝満川の沿岸になる(以下図 21 参照)。この沿岸で弥生時代の遺跡が密集し、人口密度が高かったと推定されているのが、小郡市付近である。投馬をツマと読むと、筑紫平野南部が古代にツマ国と呼ばれていたこととの関連が考えられる。ここは、旧三瀬郡、みづま 旧上妻郡、かみつま 旧下妻郡に分かれ、いずれもツマがついていた。投馬国は五万余戸と記されている大国である。当時はさらに広く、筑紫平野北部の小郡市・久留米市などの旧御井・御原郡、朝倉市などの旧上座・下座・夜須郡あたりまで含まれていてもおかしくない。古代は政治の中心を大河の近くではなく、安全でしかも全体が見渡せる高台に置くことが普通であったと考えられる。投馬国の場合、それが小郡付近だったのではないか。小郡には歴史時代に郡衙が置かれた。このあたりが、古来この地方を統治する中心地だったと思われる。投馬国には、肥前の大環濠集落吉野ヶ里遺跡のあたりまでも含まれていた可能性もある。そうであれば、吉野ヶ里がツマ国(の)首都であった可能性も考えられよう。ここも筑後川下流域全体を見渡せる高台である。もちろん魏使は、回り道してそこに立ち寄る必要はない。

福岡市の月隈付近から小郡市中心までは、直線近似では 25km 程度で、これに 20 日もかかるのは現代の感覚からは納得しにくい。しかし当時は河川の屈曲がより大きかったと推定されるし、御笠川の遡上はおそらく人力による曳き船によったことを考えると、かなり船足は遅いものであったであろう(倭人伝には倭国に「牛馬なし」とある)。またこの間には二日市市内の現在陸地の部分が含まれる。分水嶺では船の乗りかえと荷物の積み替えにかなりの時間が費やされたであろう。日本列島は雨が多いことも忘れてはならない。

魏使は大変多くの下賜品を持参していた。また正使となると、後年の朝鮮通信使の例でもわかるように、途中の接待や天候待ちによる停滯がかなりあったと思われる。

そればかりではない。倭人伝には、卑弥呼に与えた魏の天子の詔書が載っているが、これには天子が下賜する品々を「ことごとく以て汝の国中の人々に示し、国家(魏)の汝をいつくしむを知らしむべし」と書かれている。行程の先々で人々に見せびらかすよう命令されているのである。弥生時代人口稠密であったと推定されている御笠川流域から小郡市あたりまでは、あちこちで展示する必要があったと思われる。このようなわけで多少の誇大表現も加味した概数として、水行二〇日という記事になったのではないか。

この水行行程では、川の屈曲で船行の里程がつかみにくいばかりか、御笠川から宝満川への船の乗り換えなど、里程に比べ不釣り合いなほど日数がかかったものと思われる。不彌国以降の行程を、これまでの里程表示ではなく日程表示としたのは、実際の距離がよく分からぬことばかりではなく、魏使が帰国後報告する際に、意外なほど時間がかかったことを強調する目的もあったのではないか。

11. いよいよ邪馬台国へ

小郡市付近からは、まずまた南に水行し、やがて筑後川に合流するとこれを東に遡上することになる。筑後川の屈曲が激しく最終的にどの方角に向かっているかがわかりにくいために、ここでも出発方向をとつて「南水行十日」としたと考えられる。

筑後川は朝倉市から大分県日田市へ入るあたりで大きく屈曲して急流となるばかりか、早瀬を作っているので、朝倉市杷木附近から先の遡上は難しかったであろう。従って魏使は北岸では杷木の辺りか、あるいは南岸のうきは市内のどこかで上陸して陸路をとらざるを得なかつたであろう。小郡付近からここまで水行の距離は、現在の宝満川と筑後川の流路をほぼ直線でたどると、30km程度である。実際には屈曲が多く、また筑後川の遡上が長いので、上記の事情を考慮すると正使が水行に十日かかったのは十分理解できる。

この付近から陸行一月の邪馬台国とはどこか。これにはさきに述べた「わた女王国の東に海を度ること千余里、また国あり、皆倭種なり」が手がかりになる。

九州東岸では、これまで宇佐市から豊前高田市のあたりに弥生時代の遺跡が多いことが知られてきた。宇佐の中央を流れる駅館川に沿って大規模な集落遺跡が発見されている。本文で述べたように、問題の弥生時代終末期に後漢～三国時代の特徴を備えた斜縁六獣鏡が出土した。これは3世紀前半代に駅館川に沿った地域の方形周溝墓に副葬されたと推定されている。そのほかにもこの地域には後漢鏡片を出土した京徳遺跡など、副葬品を伴う集団墓が知られている。

また背後の安心院盆地で銅矛9本が発見され、弥生時代終末～古墳時代初めの大平石棺群から、鉄製武器・後漢鏡片・玉などが出土している。さらに近年、国道10号線バイパスや東九州道の建設が進むに伴い、豊前地域一帯で大型遺跡が次々と見つかっている[77]。なかでも山国川左岸の唐原遺跡群は、弥生時代後期の環濠集落で、全体の面積は国内最大級の30haに達すると推定されている。

12. 広域国家の邪馬台国

以上のことから、山国川流域以南の豊前が、邪馬台国の有力な候補として浮かび上がってくる。それにしても、「魏志倭人伝」の七万余戸は多いように思われる。しかし大分県の内陸部でも、弥生時代の遺跡の発見が近年相次いでいる。豊富な鉄器を持つ大野川流域の遺跡群は、その代表的な例である。

これらを考慮すると、大分県のほぼ全域、あるいはそれを超えて一部宮崎県北部や熊本県の北東部を含むほどの領域が、邪馬台国であったのではないか。その中で卑弥呼の宮殿は、東岸に近い場所にあったのであろう。先に述べたように、倭人伝で紹介されている国々はいずれも魏使の道程に沿つて、互いに「国境」を接していたと考えられないので、投馬国と邪馬台国は、いずれもかなり広域を支配していた大国と考えられる。

魏志倭人伝の七万余戸という記述にたいして、日本内で人口収容力の多い特定の場所(具体的には特定の一平野)を邪馬台国に比定する考えの人が多い。しかし有力な候補地とされる筑紫平野や、奈良県の大和盆地などにしても、人口 30 万人以上に相当すると考えられる七万戸を収容するのは難しい。これは大きな謎の一つであった。

しかしこれは、末盧国や伊都国など典型的な弥生の「クニ」からの類推で、当時の「国」を地理的にまとまつた一河川の流域平野や一盆地のような限定された地域を考える、という観にはまっているのではないか。後漢代までの中国の史書に現れる倭国の「国」は、伊都国や奴国のような小地域であったが、弥生時代も終末期となると、かなり広域的な国が成立していたと考えることができよう。それが、邪馬台国が国家連合の盟主になった理由の一つであろう。そして魏使はその役目上、その広域国家の境界内に入るだけではなく、さらに奥深く、卑弥呼の宮殿のある首都に赴かなければいかなかったのであろう。

なお「陸行1月」についてはいろいろな経路を考えることができる。図 21 の経路①は江戸時代の日田往還に当たり、越えねばならない峠(大石峠)の当時の高さは当時おそらく 400m 台で比較的低いと考えられる。しかしこの経路は山国川の水運が利用できたはずであるので、陸行とだけ書くかどうか疑問が残る。

経路②は、重要な場所と考えられる安心院盆地と宇佐の龜山に直接出られるので、①より距離より近そうである。しかし途中少なくとも 500m 以上の高さを超える必要がある。しかし前述の末盧国から伊都国へも 500m 以上の峠を越えたと推定されるので、このルートもあり得るであろう。

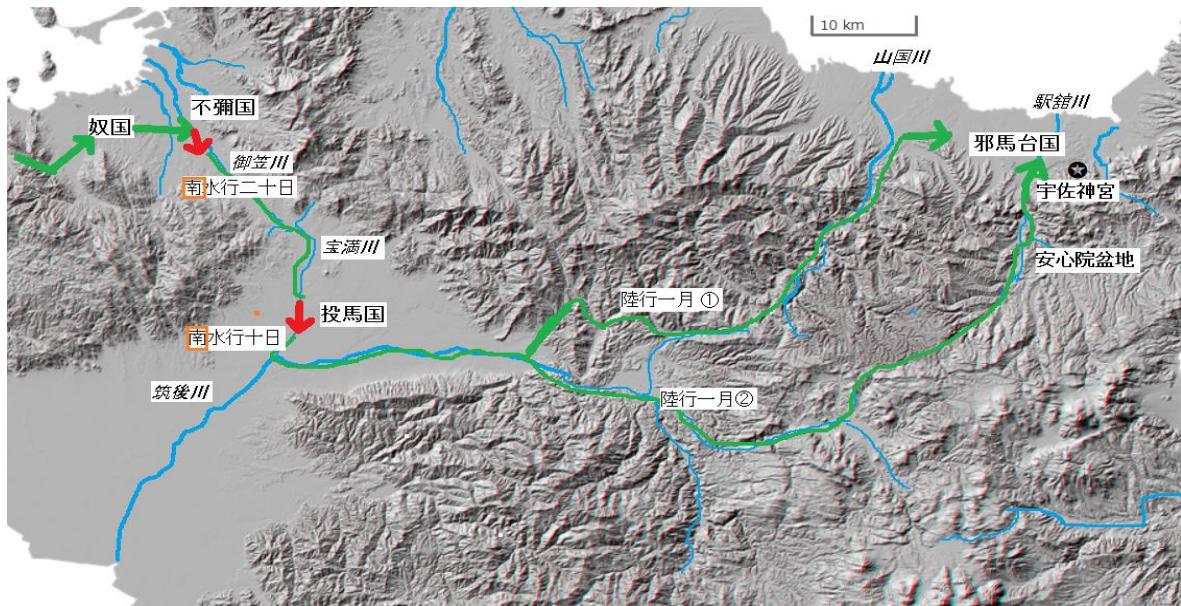


図 21 魏志倭人伝による不彌国から邪馬台国までの行程の推定（国土地理院地図使用）

以上のようにかなり苦労が多く時間のかかる行程をとらざるを得なかったのは、魏帝の命令で人口の多い地域を通る必要があったことばかりではなく、邪馬台国連合に属していなかったと思われるムナカタを経由することを、安全のため避けたためではないかと思われる(本文5. 1節参照)。